

長岡京跡右京第913次  
発掘調査報告

2008

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター





(1) 調査地遠景(北から)



(2) 前半期調査区全景(垂直、上が北東)





(1) 横穴式石室残存状況(南東から)



(2) 横穴式石室掘形完掘状況(南東から)



## 序 文

本報告書は、当埋蔵文化財センターが平成19年度に実施した長岡京跡右京第913次調査に関するものです。

今回の発掘調査は、市内で創立が最も古い長岡京市立長法寺小学校の校舎建て替え工事に伴って行ったもので、特に横穴式石室の残骸を確認できたことは、予期せぬ大きな成果でした。石室は、後世に大きく攪乱を受けていましたが、副葬品と考えられる遺物や埋葬されていた石棺の破片がまとまって出土した他、墳丘の盛土の一部も残存していました。このように、これまで存在が知られていなかった古墳を発見できた意義は大きく、長岡京市の古墳時代史を解明していく上に貴重な資料になるものと考えられます。

また、調査期間中には、長法寺小学校の児童に対する見学会や体験発掘、および育友会への説明会などを催し、地域の歴史を学ぶ教材として活用していただく機会を設定いたしました。

最後になりましたが、調査期間中にご理解とご協力をたまわりました長法寺小学校の教職員や育友会の皆様、ならびに工事関係の方々に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

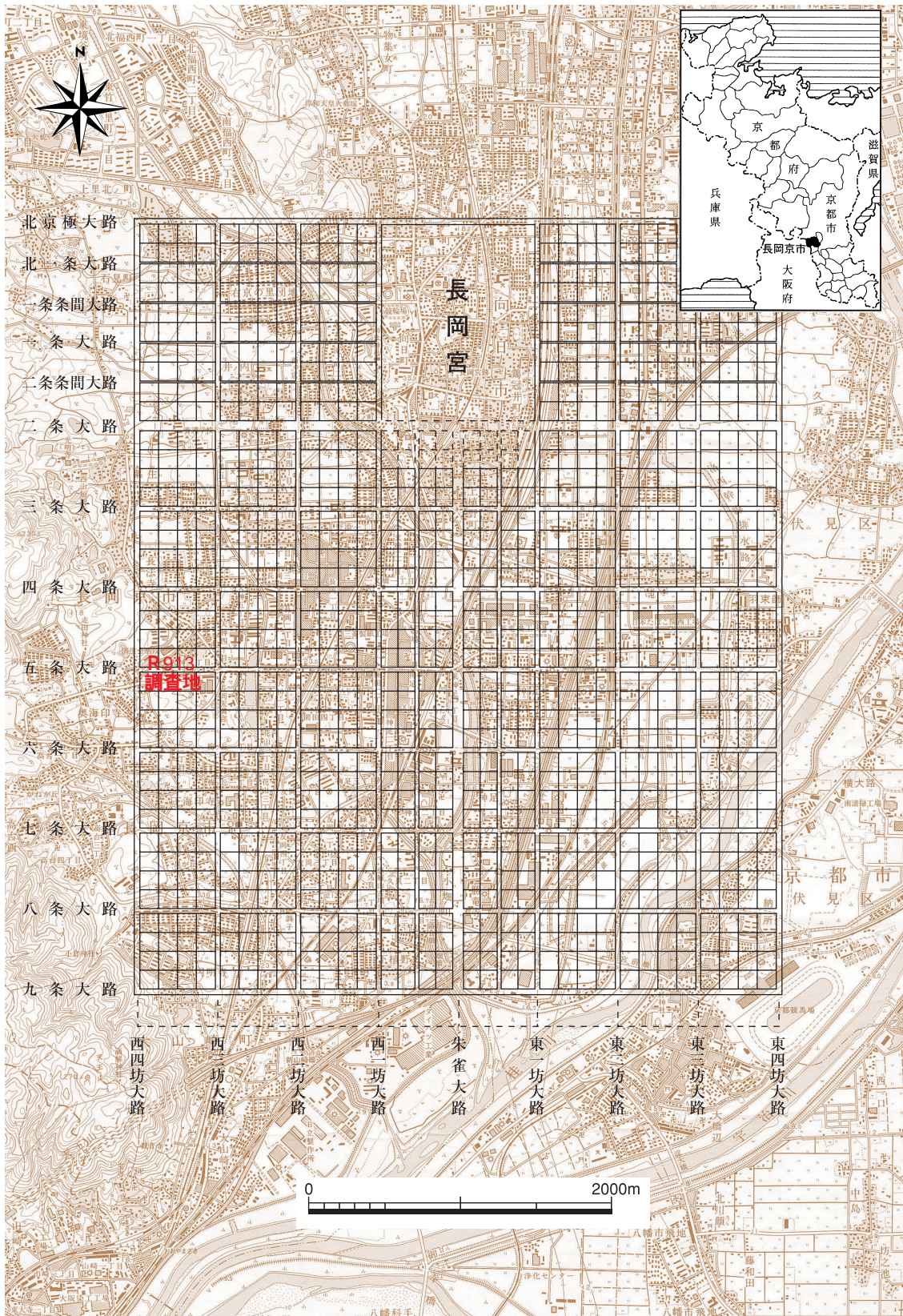
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター  
理事長 芦田 富男

## 凡 例

1. 本書は、長法寺小学校の校舎改築に伴い、平成19(2007)年9月10日から11月8日までの調査期間に、京都府長岡京市長法寺河原谷31で実施した発掘調査成果の概要報告である。調査面積は、約180m<sup>2</sup>である。
2. 調査は、長岡京市の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査および整理作業は、同センター調査係総括主査の岩崎 誠が担当した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
4. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
5. 本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年)に従って略記した。
6. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一(1991年)によった。
7. 本書において使用している各遺構固有名称は、長岡京跡に関する調査として、遺構記号+調査次数+遺構番号としているが、各遺構の固有名称が長くなり、本文や図面に表現しにくいいため、ここでは調査次数を省略している。
8. 本書で使用している平面座標は、旧国土座標第 系によっている。
9. 本書で用いた土層の色調は、「新版標準土色帖」1998年版を参考にした。
10. 遺物写真は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。
11. 現地での実測作業は、(株)文化財サービスに依頼し、(株)サポートスタッフの協力を得た。航空写真とその測量は、(株)かんこうに依頼した。
12. 本書掲載の遺構実測図製図は、文化財サービスに依頼した。
13. 本書の執筆・編集は岩崎が担当したが、編集作業は、同センター山本輝雄係長とともに行った。

\*表紙カット 横穴式石室内出土の須恵器台付長頸壺





第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

## 本文目次

序文 .....	i
凡例.....	ii
第1章 調査経過 .....	1
第2章 検出遺構 .....	3
1 近代の遺構 .....	3
2 古墳時代の遺構 .....	3
3 弥生時代の遺構 .....	13
第3章 出土遺物 .....	13
1 近代の遺物 .....	13
2 鎌倉時代の遺物 .....	15
3 平安時代の遺物 .....	15
4 古墳時代の遺物 .....	16
5 弥生時代の遺物 .....	18
第4章 まとめ .....	19
1 近・現代の成果 .....	19
2 鎌倉時代の成果 .....	19
3 平安時代の成果 .....	19
4 古墳時代の成果 .....	20
5 弥生時代の成果 .....	21
6 調査の総括 .....	21

## 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) 調査地遠景(北から)  
(2) 前半期調査区全景(垂直、上が北東)
- 巻頭図版 2 (1) 横穴式石室残存状況(南東から)  
(2) 横穴式石室掘形完掘状況(南東から)
- 図版 1 前半期調査区全景(南東から)
- 図版 2 (1) 後半期調査区全景(東から)  
(2) 石室内近現代攪乱層除去段階(南東から)
- 図版 3 (1) 石室石材持ち出し跡(南東から)  
(2) 石室掘形裏込め土完掘状況(南東から)
- 図版 4 (1) 石室右側石解体坑(南東から)  
(2) 石室右側石南東端解体坑断面(南東から)
- 図版 5 (1) 石室内近現代土層断面(東から)  
(2) 石室内近現代土層断面(北西から)
- 図版 6 (1) 石室南半部残存状況断面(南東から)  
(2) 玄室部奥壁掘形北断ち割り裏込め土層(南西から)  
(3) 玄室部奥壁掘形南断ち割り裏込め土層(南西から)
- 図版 7 (1) 玄室部左側壁掘形西断ち割り裏込め土層(南東から)  
(2) 玄室部左側壁掘形中央断ち割り裏込め土層(南東から)  
(3) 玄室部左側壁掘形東断ち割り裏込め土層(東から)
- 図版 8 (1) 玄室部右側壁掘形西断ち割り裏込め土層(東から)  
(2) 玄室部右側壁掘形中央断ち割り裏込め土層(東から)  
(3) 玄室部右側壁掘形東断ち割り裏込め土層(南東から)
- 図版 9 (1) 玄室部右側壁掘形裏込め土縦断面(北東から)  
(2) 玄室部奥壁掘形裏込め土縦断面(南東から)  
(3) 玄室部左側壁掘形裏込め土縦断面(南西から)  
(4) 玄室部羨道側掘形裏込め土横断面(北西から)
- 図版 10 (1) 石室北半部残存状況断面(南東から)  
(2) 墳丘残存部断面(西から)  
(3) 墳丘残存部断面(南西から)
- 図版 11 (1) 玄室部左側壁奥の残存石(玄室面側、南西から)  
(2) 石室残存石に残る楔跡(北東から)
- 図版 12 (1) 石室残存石(1北西から、2南西から、3北東から、4南東から)  
(2) 石室掘形完掘状況(南西から)
- 図版 13 (1) 古墳時代の土器  
(2) 石棺片
- 図版 14 (1) 平安から鎌倉時代の土器  
(2) 石器・石製品、銭貨、土製品

## 挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40000) .....	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5000) .....	1
第3図	調査区土層図 (1/50) .....	2
第4図	検出遺構図 (1/100) .....	4
第5図	近代の柱列 S A08・09実測図 (1/50) .....	5
第6図	横穴式石室内の近代攪乱状況実測図 (1/50) .....	7
第7図	横穴式石室近代堆積土層図 (1/50) .....	8
第8図	横穴式石室掘形裏込め土完掘実測図 (1/50) .....	9
第9図	横穴式石室および墳丘盛土土層図 (1/50) .....	10
第10図	横穴式石室裏込め土層図 - 1 (1/50) .....	11
第11図	横穴式石室裏込め土層図 - 2 (1/50) .....	12
第12図	出土遺物実測図 (1/2・1/4) .....	14

## 付 表 目 次

付表	報告書抄録 .....	22
----	-------------	----

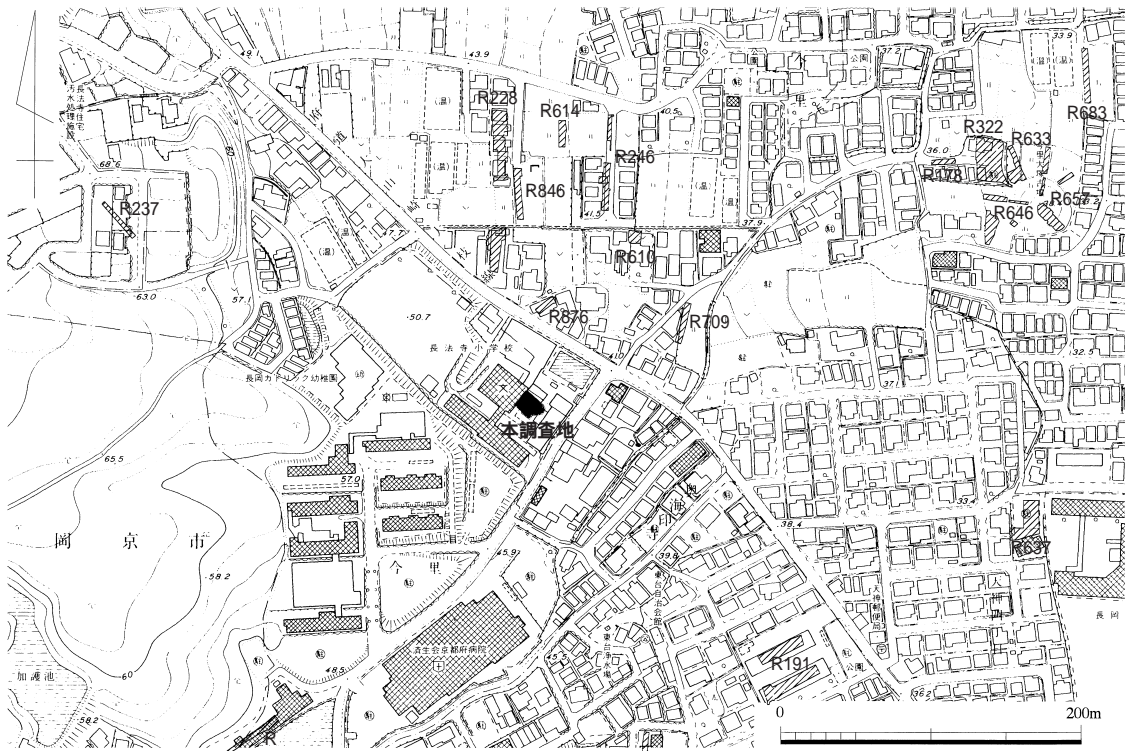
# 第1章 調査経過

当調査地は、阪急長岡天神駅の北西約900mに位置する。立地は、西から東に傾斜する山地形の先端部で、高位段丘上にある。現状は、長岡京市立長法寺小学校の校内にある。当小学校は、旧乙訓郡内で最初に設立された小学校である。今回の調査区は、校内の南部に残る木造給食棟と、便所、教室棟東棟があったところに、諸施設を解体し、新北棟を建設する部分に設定した。

調査地周辺は、長岡京域内にあるほか、弥生時代後期の長法寺遺跡の範囲にも含まれている。また、当小学校後方の丘陵地に横穴式石室をもつ古墳があったと報告されている。1972年の京都府遺跡地図には、小学校南にある、飛び地今里南平尾に、群集墳の中の1基の円墳として、その位置を推定している。現在、その古墳を南平尾古墳と呼んでいる。また、同年の遺跡地図には、長法寺谷山の丘陵先端部に、須恵器や刀片が出土した横穴式石室の円墳を表現していた。しかし古墳所在地は、長法寺力池となっており、その地名が、長法寺小学校の北西部分に当たることや、京都府遺跡地図推定地付近で実施した昭和58年度の発掘調査結果を踏まえて、昭和62年度の長岡京市遺跡地図第2版以後では、小学校グラウンドの南東部付近に推定し、力池古墳と呼んでいる。

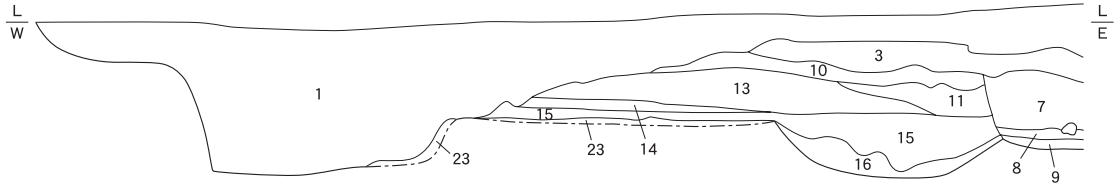
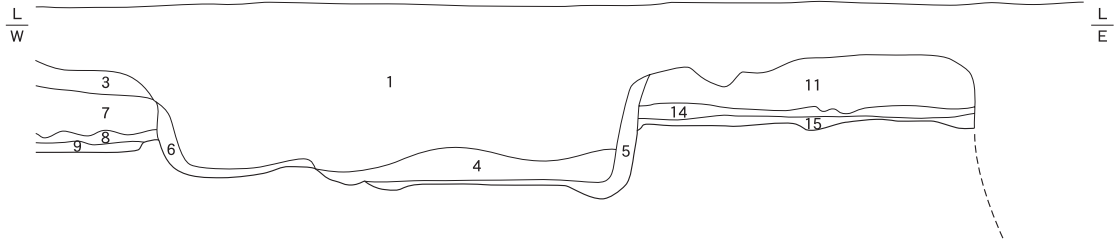
このほか、長法寺小学校の前身は、「楽信館」と呼ばれる寺子屋であったといわれている。このように、古代から近代にわたる歴史的景観がうかがえる調査地である。

調査は、掘削残土の置き場が狭いため、当初計画の調査区北西半部から着手した(図版1)。

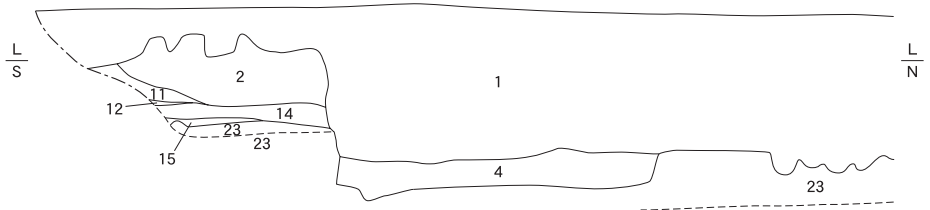
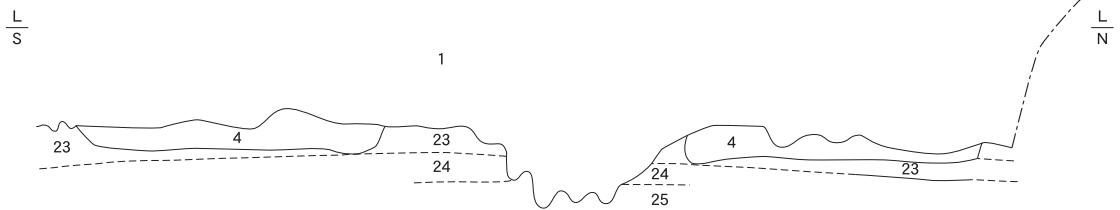


第2図 発掘調査地位置図(1/5000)

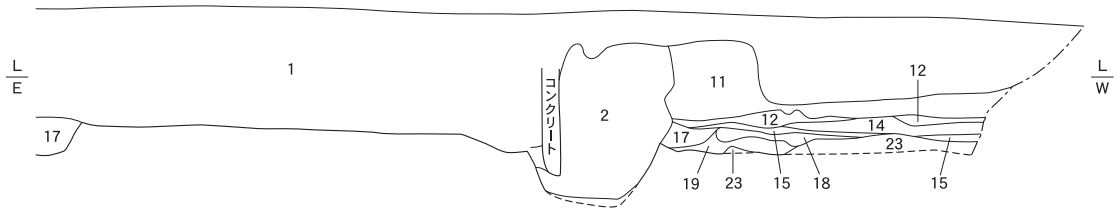
(1)調査区北東壁土層



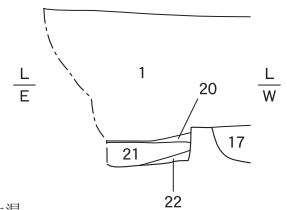
(2)調査区北西壁土層



(3)調査区南西壁西半部土層



- |                      |                       |                       |
|----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土    | コンクリート含み (現代攪乱 造成整地土) | 16 5Y4/1 灰色粘質土 (SK05) |
| 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質土    |                       | 17 2.5Y7/2 灰黄色粘質土     |
| 3 7.5YR4/2 灰褐色粘質土    | 造成整地土                 | 18 7.5YR4/1 褐灰色粘質土    |
| 4 0N7/0 灰白色こぶし大礫     | (既存建物基礎礫石)            | 19 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト  |
| 5 5PB7/1 明青灰色粘質土     |                       | 20 10YR2/1 黒褐色粘質土     |
| 6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土    |                       | 21 7.5YR4/2 灰褐色粘質土    |
| 7 7.5YR5/1 褐灰色粘質土    |                       | 22 10YR3/1 黒褐色粘質土     |
| 8 2.5Y7/4 浅黄色粘質土     |                       | 23 5Y7/3 浅黄色粘質土       |
| 9 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質土  |                       | 上面 5YR2/1 黒褐色粘質土      |
| 10 7.5YR4/1 褐灰色粘質土   | 礫・小石多混                | 24 2.5YR3/1 暗赤灰色粘質土   |
| 11 2.5YR4/2 灰赤色粘質土   |                       | 25 2.5YR5/6 明赤褐色粘質土   |
| 12 2.5Y8/2 灰白色粘質土    |                       |                       |
| 13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 |                       |                       |
| 14 10YR7/6 明黄褐色砂質土   |                       |                       |
| 15 2.5YR4/1 黄灰色粘質土   | 大面に黒色炭灰堆積             |                       |



第3図 調査区土層図 (1/50)

この部分の調査で、古墳時代後期の横穴式石室北東半部を、調査区の南西辺に沿って検出した。また、調査予定区の南東側半分が大きく削平されていた。このため、関係各組織と協議し、深い理解と協力を得て、南東半部分の調査を断念し、横穴式石室の残存部分全容解明を目的に、南西部分を拡張調査することとした。

## 第2章 検出遺構

検出遺構には、近代の遺構群が大多数を占めるが、他に、弥生時代後期の遺物包含層や、古墳時代後期の横穴式石室痕跡を検出することができた（第4図、図版2(1)）。検出面は、地表面から約80cmほどの、数層からなる盛土を除去した面であり、標高は、約43.6m前後である（第3図）。以下に、検出遺構を、新しいものから概観する。

### 1 近代の遺構

近代の遺構には、土坑や溝の他、掘立柱の柱穴列S A 08・09などがある。この内、土坑群や溝群のほとんどは、近現代の長法寺小学校に關係する構造物の所産と考えられる。しかし、掘立柱構造の柱は、江戸時代以後激減すると考えられることや、柱穴内埋土に近世丸瓦が包含されていたことから、江戸後期から明治にかけての遺構と考えられる。

**掘立柱柱列S A 08・09** 両柱列とも、1.8m等間で列ぶ柱列である（第5図）。柱列間は、約6.6mの距離を保って平行にある。深さは、約40cm前後で、全ての柱穴内に石が据え付けられていた。柱穴内に置かれた石は、砂岩や緑色岩が多く、柱穴列S A 09の北柱穴には花崗岩も含まれていた。緑色岩は、次に概観する横穴式石室石材の破砕片である可能性が考えられる。

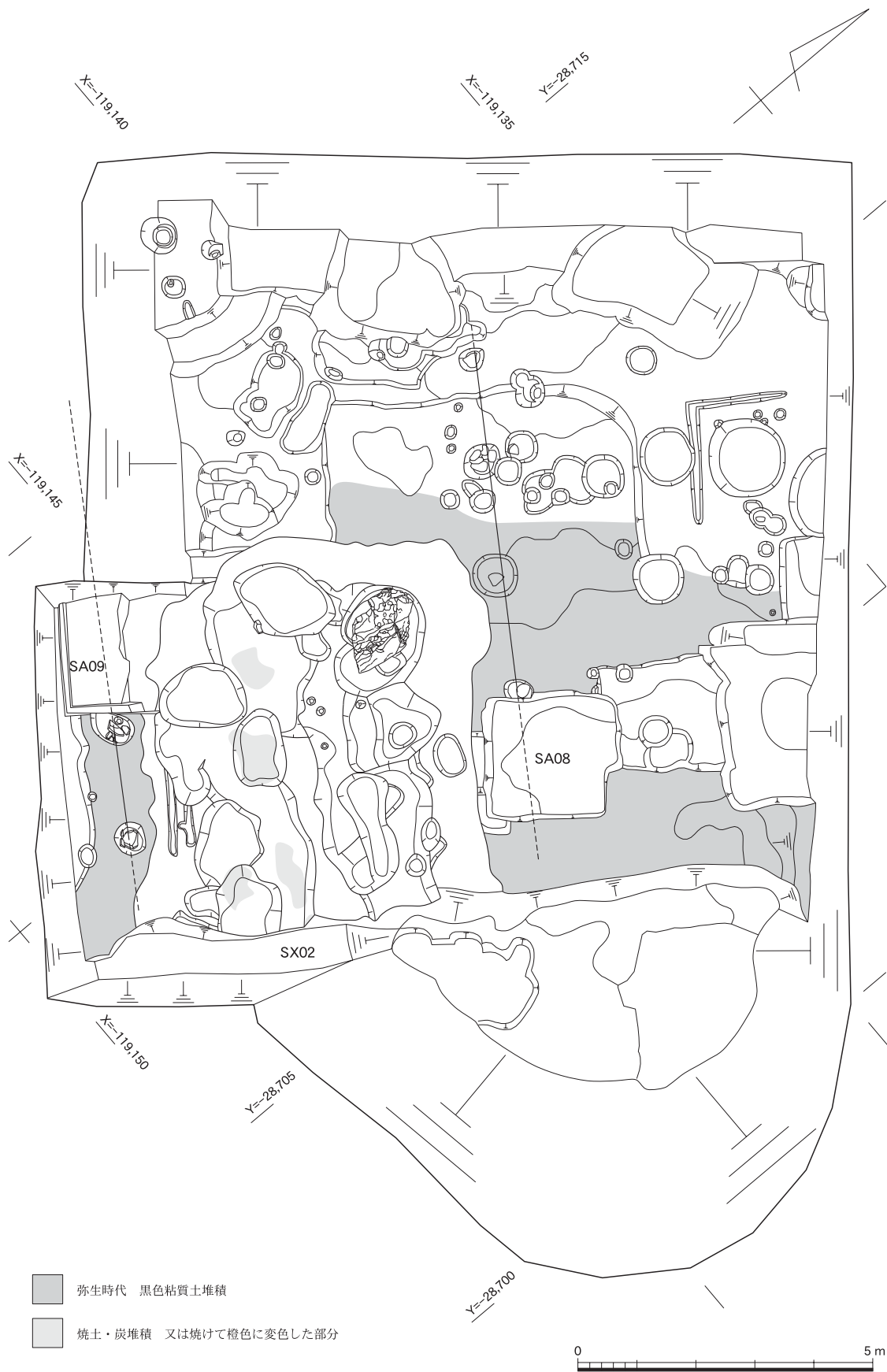
この2列の柱穴列は、柱間が約1間6尺等間で共通し、約22尺で平行していることや、柱位置が対応して対になる位置関係にあることから、1棟の建物に復元できる可能性が考えられる。出土瓦からの推定時期から、長法寺小学校前身とされる寺子屋に関わる遺構である可能性が考えられる。

### 2 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、横穴式石室S X 02があるほか、古墳の盛土と考えられる土層が一部に残存していた。

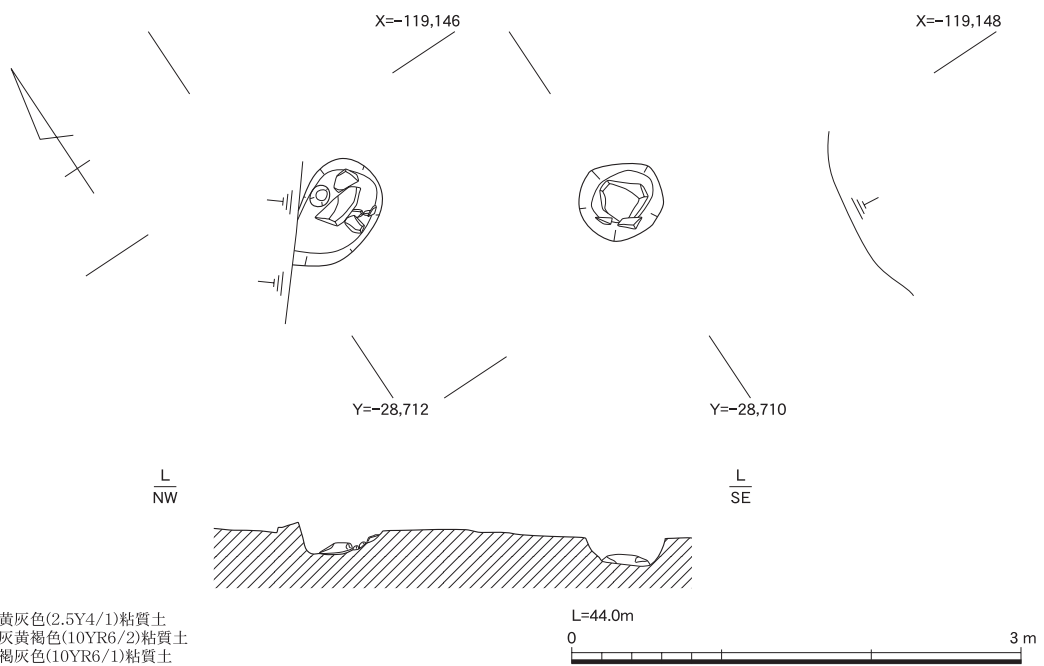
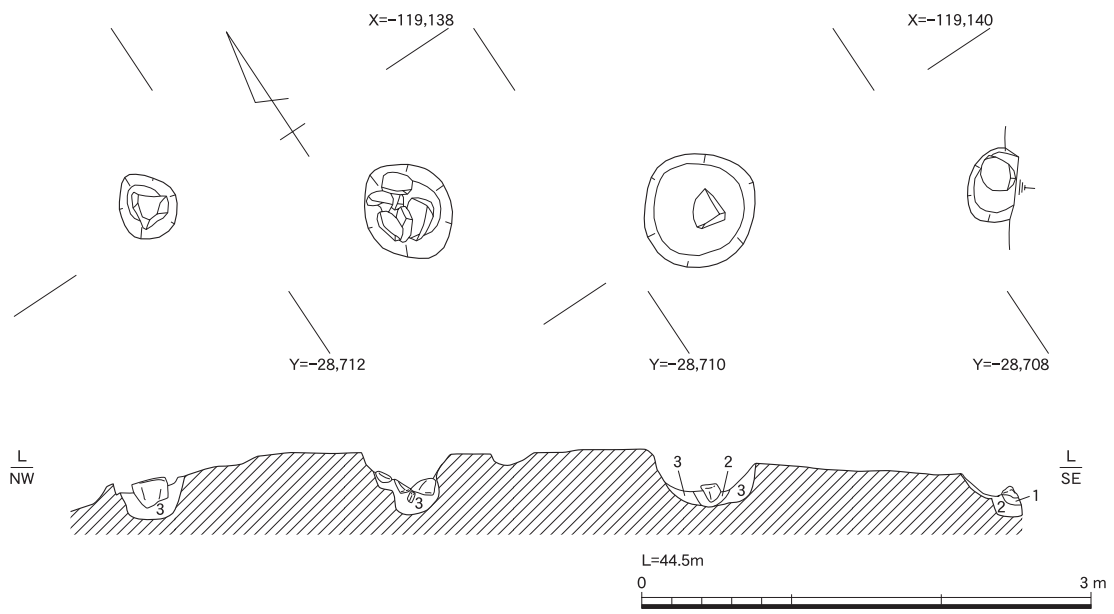
**横穴式石室S X 02** 幅約6m、深さ約0.9mの掘形をもつ。玄室部分を検出したものと考えられ、掘形奥壁から羨道部方向に、約6.5mを確認した（第6・9図、図版2～5）。これより南東の羨道部側は、大きく削平を受け、壊滅していた。当遺構掘形検出面は、弥生時代後期の遺物包含層の上面である。石室の石は、左側壁の奥壁に接する最下段の下半部が残存していた（図版11(1)）が、他の石材は全て持ち出されていた。

第6図は、石室掘形外形線と、石材取り上げ坑の掘削痕を記録した平面図である。この図から、石材を取り上げるのに、不整形の掘り込みを入れていることが分かる（図版31）。石室解体時の不整形掘り込み数から、両側壁に使用された石の数は、検出範囲内におよそ4個程



第4図 検出遺構図(1/100)





- 1 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
- 2 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土
- 3 褐灰色(10YR6/1)粘質土

第5図 近代の柱列 S A08・09実測図 (1/50)

度ずつ用いられていたと考えられる。使用石材の大きさを類推すると、幅約1.5m、厚さ約1m前後の大きな石であったと思われる。高さは、残されていた石の高さから、約0.8m以上と考えられる。また、これを基に石室を復元した場合、玄室部幅は、1.2～1.3m前後ではないかと考えられる。

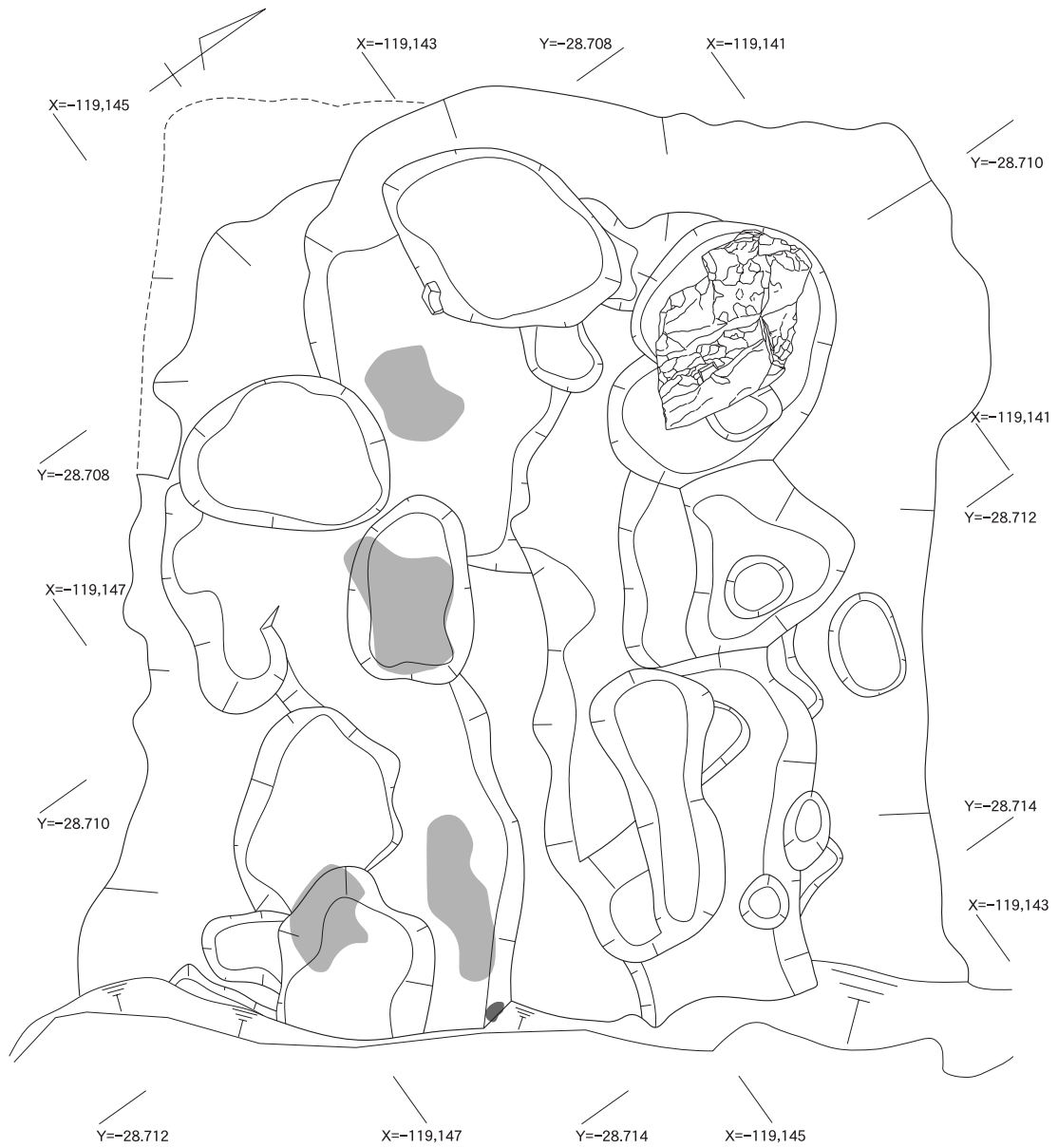
石材搬出坑の掘り込み内堆積土は、7～8層に区分でき（第7図）、遺物の出土傾向が若干異なるが、共通して出土した遺物に、近世平瓦やガラス片などがある。従って、完全に埋め戻された時期が近世から近代とかがえられる。この層を掘削して、調査前まであった木造の建物の枅形基礎が掘られ（図版2(2)）、その中に栗石が敷かれていた。

右側壁の石室石材搬出坑内には、焼け土塊や炭片が薄く堆積していた（巻頭図版2(1)、図版4(1)）。また、その内の最も羨道側にある掘り込みの北東側面には、焼成を受けて橙色に変色した部分が見られた（図版4(2)）。このような、横穴式石室解体時の坑内焼成痕から、石室側壁石材を加熱急冷却して破碎し、搬出した可能性が考えられる。石室解体後に埋め戻された土層内から、石灰岩や緑色岩などにも、焼成を受けたものが少量見られる。しかし、石材搬出坑を利用したたき火や野焼きの可能性も捨てきれない。これとは別に、残存した石室石材には、楔痕が残る（図版11(2)）。このことから、この残存石材に関しては、楔を打ち込んで割られた上半部が搬出されたと言える。この石室残存石は、石室内面側に平坦面をもつ風化面が残り、原位置を大きく動かされることがなかったと考えられる。石材は緑色岩類である。

石室解体後に埋め戻された土層（第7図、図版5）には、硬く締まった黒色系の粘質土があり、この層には、粉碎された石棺材の凝灰岩片が多く含まれていた。また褐灰色系の粘質土には、瓦器や土師器などの中世土器類が多く含まれていた。

石室解体時の埋め戻し層を除去し、横穴式石室の掘形に残る石室裏込め土の横断面と縦断面の観察を行った（第9～11図）。横断面の観察からは、奥壁周辺部の裏込め土が観察しやすい土層堆積になっており、D-DとF-F断面では、4～5回の作業工程で埋め戻されている状況がうかがえた。これを縦断面に連動させて見ると、奥壁固定に第2回埋め戻し行程後、両側石の固定埋め戻しを行い、次の2～3回の作業工程で玄室部の1段目の石材裏込め戻しを完了していると考えられる。羨道部側には、両側石の裏込め土の埋め戻し状況と異なり、薄い層を幾重にも埋め戻していく状況に変化している（第11図1～15層）。この裏込め土の移り変わり部分が、羨道部への移行箇所になるのかも知れない。そうだとすれば、玄室部奥行きは、およそ3m程度と考えられる。いずれにしても、玄室部奥壁から羨道部への裏込め土充填の作業工程が具体的に観察できた。

石室裏込め土を完全に除去した面には、一部に、掘削用の鋤跡と思われる連続した三日月形の窪みが見られた。掘形裏込め土内からは、弥生土器の細片が数点、裏込め土に用いられた黒色系の粘質土に含まれていた以外、何も出土しなかった。弥生土器出土の黒色系粘質土は、後で記す弥生土器包含層を起源とする土層と考えられる。

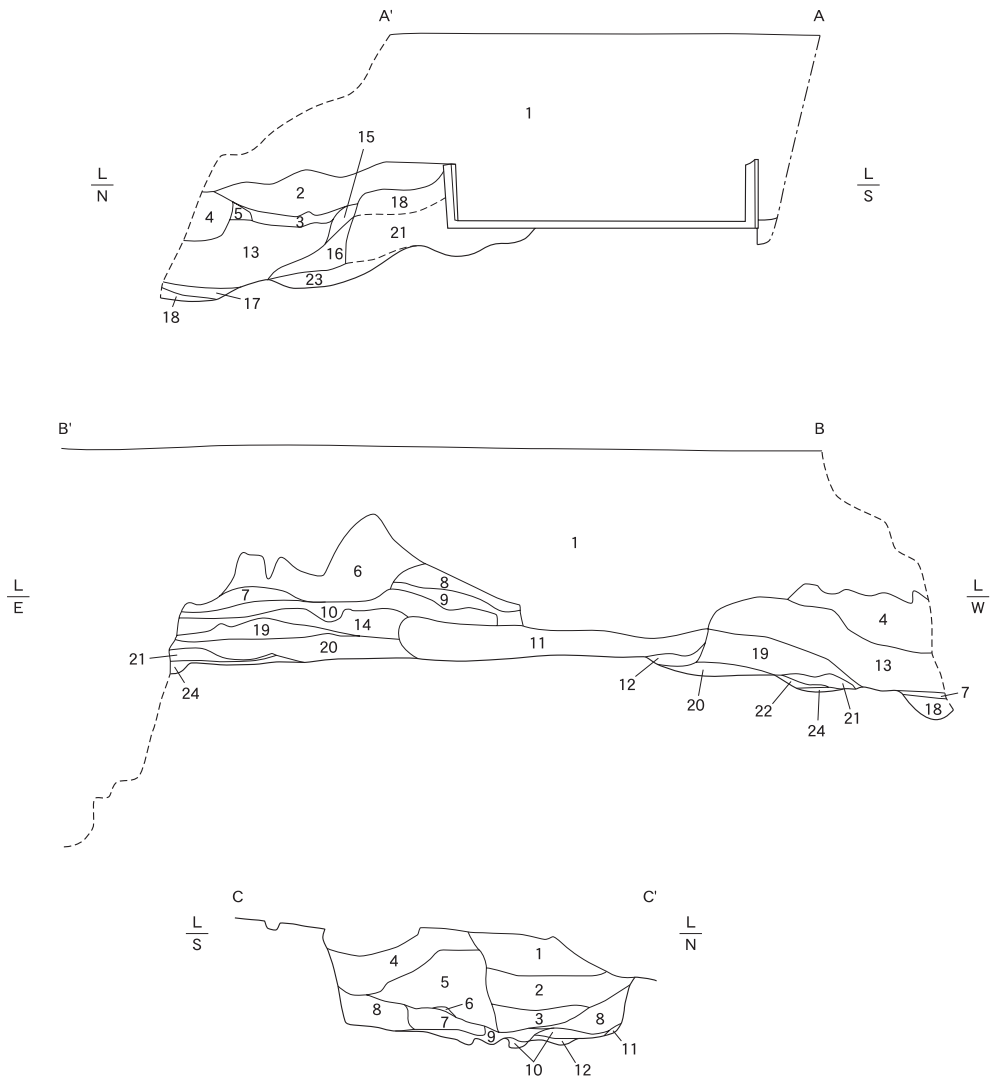


石室掘形内検出の近代攪乱坑

- 焼け土、炭灰、堆積部分
- 近代攪乱坑の掘り込み面が  
橙色に変色している部分



第6図 横穴式石室内の近代攪乱状況図 (1/50)



A-A'・B-B' 土層名

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 コンクリート含み
- 2 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 3 5Y8/2 灰白色砂
- 4 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 5 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
- 6 5Y4/1 褐灰色粘質土
- 7 5YR4/2 灰褐色粘質土
- 8 10Y6/1 灰色粘質土
- 9 7.5YR6/6 橙色粘質土
- 10 10YR6/1 褐灰色粘質土
- 11 0N7/0 灰白色こぶし大礫 (近・現代建物基礎栗石)
- 12 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
- 13 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 14 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 15 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混
- 16 2.5Y8/3 淡黄色粘質土
- 17 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
- 18 10YR7/2 にぶい黄橙色砂
- 19 0N2/0 黑色粘質土
- 20 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 21 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
- 22 10YR2/1 黑色粘質土
- 23 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
- 24 10YR5/1 褐灰色粘質土

C-C' 土層名

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 7.5YR7/8 黄橙色粘質土混
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 7.5YR4/1 褐灰色粘質土混
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 7.5Y5/6 明褐色粘質土混
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 5Y6/8 橙色粘質土混
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 2.5Y4/1 黄灰色粘質土混
- 6 2.5YR4/3 にぶい赤褐色焼土粘土
- 7 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土混
- 8 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 焼土・炭含み 2.5Y4/1 黄灰色粘質土混
- 9 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土 砂礫含み
- 10 2.5Y3/1 黄灰色砂 小石含み
- 11 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 2.5Y3/1 黄灰色砂含み
- 12 5YR3/1 黒褐色炭灰 2.5YR5/6 明赤褐色焼土含み

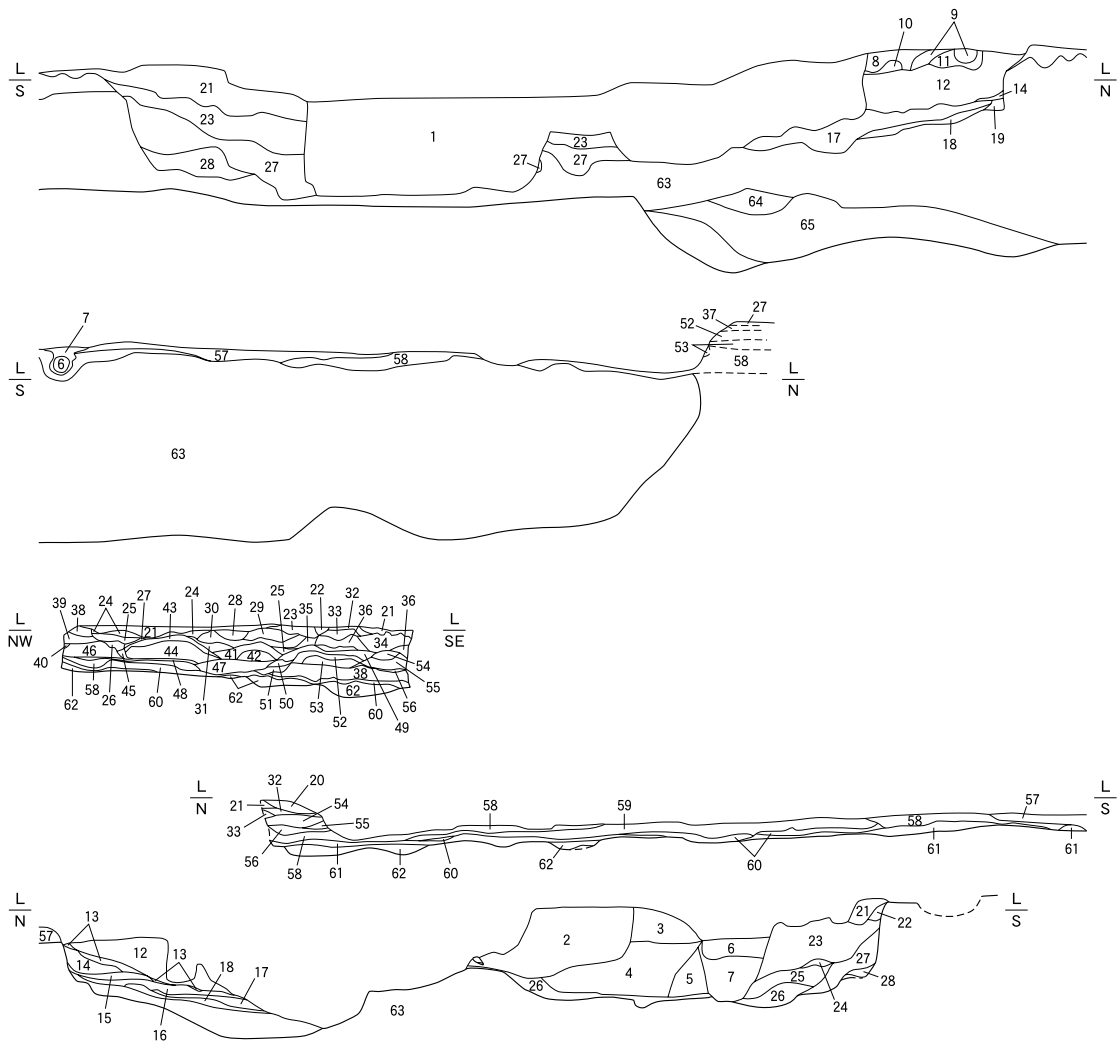


第7図 横穴式石室近代堆積土層図(1/50)



アルファベットは、第7図・第9図～第11図の土層図記録位置を示す。 0 3 m

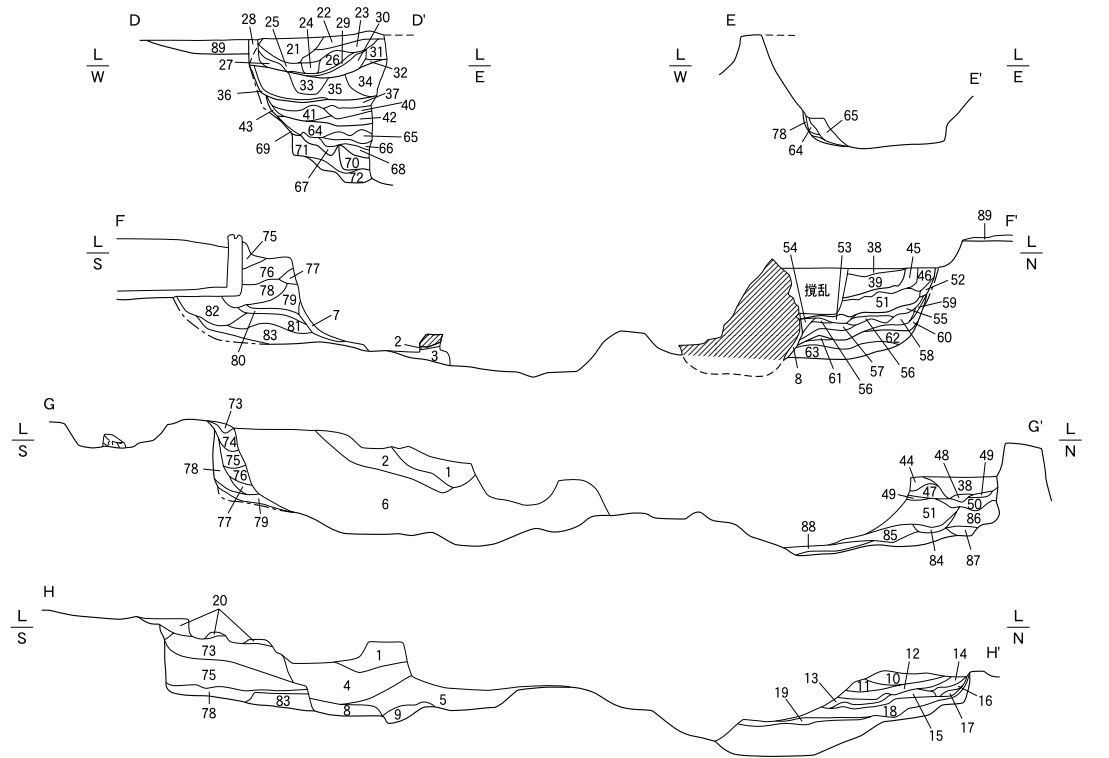
第8図 横穴式石室掘形裏込め土完掘実測 (1/50)



- |    |          |                 |              |
|----|----------|-----------------|--------------|
| 1  | 5YR5/1   | 褐色粘質土           | コンクリート含み(現代) |
|    | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土           | 椀瓦含み(近代)     |
| 2  | 10YR4/2  | 灰黄褐色粘質土         |              |
|    | 7.5YR7/8 | 黄橙色粘質土混         |              |
| 3  | 10YR4/3  | にぶい黄褐色粘質土       |              |
|    | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土混          |              |
| 4  | 10YR5/3  | にぶい黄褐色粘質土       |              |
|    | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質土混         |              |
| 5  | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色粘質土         |              |
|    | 5Y6/8    | 橙色粘質土混          |              |
| 6  | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色粘質土         |              |
|    | 2.5Y6/8  | 橙色粘質土混          |              |
| 7  | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土           |              |
| 8  | 7.5YR8/4 | 浅黄褐色粘質土         |              |
| 9  | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土           |              |
|    | 2.5Y8/3  | 浅黄色粘質土混         |              |
| 10 | 0N3/0    | 暗灰色粘質土          |              |
| 11 | 2.5Y6/2  | 灰黄色粘質土          |              |
|    | 10Y8/2   | 灰白色粘質土混         |              |
| 12 | 7.5Y7/2  | 灰白色粘質土          |              |
|    | 7.5YR7/8 | 黄橙色鉄分含み         |              |
| 13 | 7.5Y3/1  | オリーブ黒色粘質土       |              |
| 14 | 10YR7/3  | にぶい黄褐色粘質土       |              |
|    | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土混          |              |
|    | 10Y8/2   | 灰白色粘質土混         |              |
| 15 | 5Y6/1    | 灰色粘質土           |              |
| 16 | 10Y8/2   | 灰白色粘質土          |              |
| 17 | 10Y7/2   | 灰白色粘質土          |              |
|    | 7.5Y5/1  | 灰色粘質土混          |              |
|    | 10YR6/8  | 明黄褐色鉄分含み        |              |
| 18 | 7.5Y7/6  | 橙色粘質土           |              |
| 19 | 7.5YR4/1 | 褐色粘質土           |              |
|    | 10YR7/3  | にぶい黄褐色粘質土混      |              |
|    | 10YR8/2  | 灰白色粘質土混         |              |
|    | 2.5Y8/3  | 淡黄色粘質土          |              |
|    | 7.5YR3/1 | 黒褐色粘質土          |              |
|    | 22       | 10YR5/3         | にぶい黄褐色粘質土    |
|    | 23       | 2.5Y4/1         | 黄灰色粘質土       |
|    | 24       | 2.5Y7/4         | 浅黄色粘質土       |
|    | 25       | 2.5Y7/4         | 浅黄色粘質土       |
|    | 26       | 2.5Y6/6         | 明黄褐色粘質土      |
|    | 27       | 10YR8/6         | 黄褐色粘質土       |
|    | 28       | 2.5Y7/2         | 灰黄色粘質土 下位粗砂  |
|    | 29       | 7.5YR4/2        | 灰褐色粘質土       |
|    | 30       | 7.5YR4/1        | 褐色粘質土        |
|    | 31       | 7.5Y7/6         | 明黄褐色粘質土      |
|    | 32       | 2.5Y5/2         | 暗灰黄色粘質土      |
|    | 33       | 10YR4/1         | 褐色粘質土        |
|    | 34       | 7.5Y7/6         | 明黄褐色粘質土      |
|    | 35       | 7.5Y7/6         | 明黄褐色粘質土      |
|    | 36       | 2.5Y6/2         | 灰黄色粘質土       |
|    | 37       | 7.5Y7/6         | 明黄褐色粘質土      |
|    | 38       | 2.5Y7/3         | 浅黄色粘質土       |
|    | 39       | 2.5Y5/2         | 暗灰黄色粘質土      |
|    | 40       | 7.5YR3/1        | 黒褐色粘質土       |
| 41 | 7.5YR4/2 | 褐色粘質土           |              |
| 42 | 7.5YR3/1 | 黒褐色粘質土          |              |
| 43 | 10YR2/1  | 黒色粘質土           |              |
| 44 | 2.5Y7/4  | 浅黄色粘質土          |              |
| 45 | 10YR6/2  | 灰黄褐色粘質土         |              |
| 46 | 10YR4/2  | 灰黄褐色粘質土         |              |
| 47 | 10YR5/1  | 褐色粘質土           |              |
| 48 | 0N2/0    | 黒色粘質土           |              |
| 49 | 2.5Y4/1  | 黄灰色粘質土          |              |
| 50 | 10YR4/2  | 灰黄褐色粘質土         |              |
| 51 | 7.5YR3/1 | 黒褐色粘質土          |              |
| 52 | 2.5Y7/4  | 浅黄色粘質土          |              |
| 53 | 10YR5/1  | 褐色粘質土           |              |
| 54 | 10YR6/2  | 灰黄褐色粘質土         |              |
| 55 | 10YR2/1  | 黒色粘質土           |              |
| 56 | 10YR8/6  | 黄褐色粘質土          |              |
| 57 | 0N2/0    | 黒色粘質土           |              |
| 58 | 10YR6/1  | 褐色粘質土           |              |
| 59 | 7.5YR4/2 | 灰褐色粘質土          |              |
| 60 | 7.5YR4/2 | 灰褐色粘質土          |              |
| 61 | 7.5YR4/3 | 褐色粘質土           |              |
| 62 | 7.5YR4/3 | 褐色粘質土           |              |
| 63 | 5Y       | 浅黄色粘質土~7.5YR4/2 | 褐色粘質土 高位段丘   |
| 64 | 2.5Y5/2  | 暗灰黄色砂礫          | 高位段丘         |
| 65 | 10YR3/2  | 黒褐色粘質土          | 高位段丘         |



第9図 横穴式石室および墳丘盛土土層図(1/50)



石室内堆積層名

- 1 5YR5/1 褐灰色粘質土 コンクリート混
- 2 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 棧瓦混
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土
- 4 5YR4/1 褐灰色粘質土
- 5 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
- 6 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 8 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土
- 9 7.5YR4/1 褐灰色粘質土

石室掘方裏込め土層名

- 10 7.5Y7/2 灰白色粘質土
- 11 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
- 12 5Y7/2 灰白色粘質土
- 13 7.5YR7/8 黄褐色粘質土混
- 14 5Y6/1 灰白色粘質土
- 15 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土
- 16 10YR8/2 灰白色粘質土
- 17 10YR7/1 灰白色粘質土
- 18 10YR2/1 黒色粘質土混
- 19 10YR7/2 灰白色粘質土
- 20 7.5Y7/1 灰白色粘質土
- 21 10YR8/6 黄褐色粘質土含み
- 22 7.5Y7/6 橙色粘質土
- 23 10YR2/1 黒色粘質土
- 24 10YR7/3 にぶい橙色粘質土
- 25 10YR6/2 灰褐色粘質土 小石含み
- 26 2.5Y7/3 浅黄褐色粘質土
- 27 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 28 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
- 29 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混
- 30 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 31 10YR3/1 黒褐色粘質土混
- 32 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 33 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土 小石・砂混
- 34 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
- 35 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 36 2.5Y8/4 浅黄色粘質土

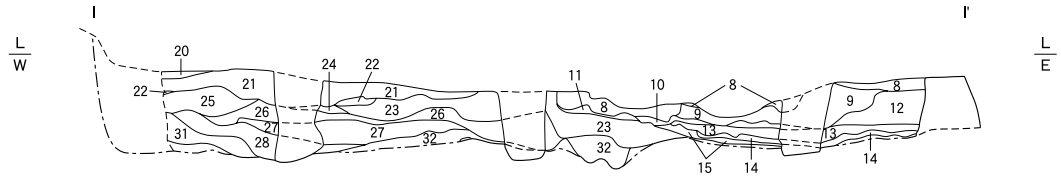
- 33 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 34 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土混
- 35 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 36 10YR8/4 浅黄褐色粘質土斑入
- 37 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
- 38 10YR3/1 黒褐色粘質土混
- 39 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 40 7.5YR6/4 にぶい黄褐色粘質土
- 41 10YR3/1 黒褐色粘質土含み
- 42 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土
- 43 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 44 10YR3/1 黒褐色粘質土混
- 45 10YR8/4 浅黄褐色粘質土混
- 46 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土
- 47 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 48 2.5Y2/1 黒色粘質土
- 49 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土混
- 50 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 51 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
- 52 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 53 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土
- 54 7.5GY7/1 明緑灰色粘質土
- 55 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 56 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土
- 57 10YR8/3 浅黄褐色粘質土混
- 58 2.5Y2/1 黒色粘質土混
- 59 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 60 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 61 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
- 62 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 63 10YR3/2 黒褐色粘質土混
- 64 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- 65 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
- 66 10YR3/2 黒褐色粘質土混
- 67 7.5Y8/2 灰白色粘質土混
- 68 2.5Y4/2 暗灰色粘質土
- 69 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 70 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土

- 60 2.5Y7/2 灰黄色粘質土
- 61 2.5Y8/4 淡黄色粘質土
- 62 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- 63 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土
- 64 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
- 65 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 66 10YR7/6 明黄褐色粘質土
- 67 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 68 10YR3/1 黒褐色粘質土混
- 69 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 70 10YR3/1 黒褐色粘質土混 炭有り
- 71 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 72 2.5YR5/2 暗灰黄色粘質土
- 73 0N2/0 黒色粘質土
- 74 10YR6/2 灰黄褐色粘質土混
- 75 2.5Y8/2 灰白色粘質土
- 76 10YR3/1 黒褐色粘質土混
- 77 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
- 78 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 79 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 80 2.5Y3/1 黒褐色粘質土含み
- 81 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 82 10Y8/1 灰白色粘質土
- 83 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 84 10Y8/1 灰白色粘質土混
- 85 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 86 10YR8/1 灰白色粘質土
- 87 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 88 10YR2/1 黒色粘質土混
- 89 7.5Y4/2 灰褐色粘質土
- 90 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 91 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 92 10YR2/1 黒色粘質土混
- 93 7.5Y4/2 灰褐色粘質土
- 94 10YR3/4 暗褐色粘質土
- 95 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土
- 96 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 97 7.5YR4/3 褐色粘質土
- 98 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
- 99 0N3/0 暗灰色粘質土
- 100 7.5YR2/1 黒色粘質土 (弥生土器包含層)

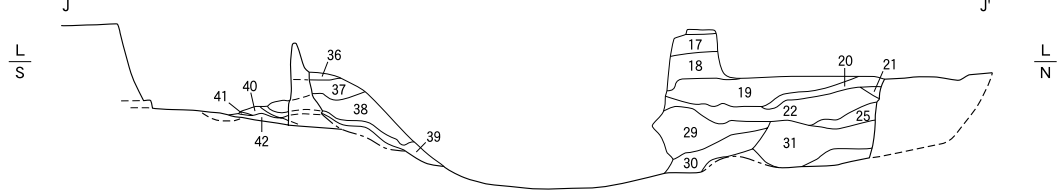


第10図 横穴式石室裏込め土層図 - 1 (1/50)

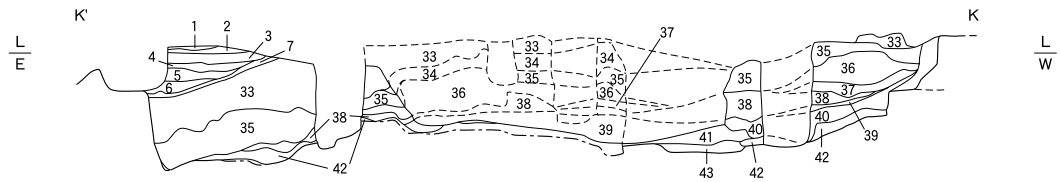
北壁



西壁



南壁



- |                        |                      |                      |
|------------------------|----------------------|----------------------|
| 1 10YR8/6 黄橙色粘質土       | 18 10YR3/1 黒褐色粘質土    | 30 0N2/0 黒色粘質土       |
| 2 10YR7/6 明黄褐色粘質土      | 10YR8/4 浅黄橙色粘質土 斑入   | 10YR6/2 灰黄褐色粘質土混     |
| 3 10YR2/1 黒色粘質土        | 19 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土 | 2.5YR5/2 暗灰黄色粘質土混    |
| 4 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土    | 20 7.5YR7/4 にぶい橙色粘質土 | 31 10YR6/2 灰黄褐色粘質土   |
| 5 10YR7/6 明黄褐色粘質土      | 21 10YR5/2 灰黄褐色粘質土   | 32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 |
| 6 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土    | 22 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土 | 10YR3/2 黒褐色粘質土混      |
| 7 10YR2/1 黒色粘質土        | 23 10YR4/2 灰黄褐色粘質土   | 33 2.5Y5/3 黄褐色粘質土    |
| 8 7.5Y7/2 灰白色粘質土       | 24 10YR5/2 灰黄褐色粘質土   | 34 2.5Y5/3 黄褐色粘質土    |
| 9 7.5YR7/8 黄橙色鉄分含み     | 25 7.5YR7/4 にぶい橙色粘質土 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土含み     |
| 7.5YR7/8 黄褐色粘質土含み      | 26 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 | 35 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土   |
| 10 5Y6/1 灰色粘質土         | 10YR8/3 浅黄橙色粘質土混     | 36 10YR4/2 灰黄褐色粘質土   |
| 11 10YR8/2 灰白色粘質土      | 2.5Y2/1 黒色粘質土混       | 37 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土   |
| 12 10YR7/1 灰白色粘質土      | 27 2.5Y7/4 浅黄色粘質土    | 2.5Y7/3 浅黄色粘質土混      |
| 10YR2/1 黒色粘質土混         | 10YR3/2 黒褐色粘質土混      | 38 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 |
| 13 7.5YR7/1 灰白色粘質土     | 7.5Y8/2 灰白色粘質土混      | 39 10YR8/1 灰白色粘質土    |
| 10YR8/6 黄褐色粘質土含み       | 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混   | 40 10YR3/2 黒褐色粘質土    |
| 14 7.5Y7/6 橙色粘質土       | 28 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土 | 10YR2/1 黒色粘質土混       |
| 15 10YR8/6 黄褐色粘質土      | 29 10YR6/2 灰黄褐色粘質土   | 41 7.5Y4/2 灰褐色粘質土    |
| 16 10YR6/2 灰褐色粘質土 小石含み | 10YR7/6 明黄褐色粘質土混     | 42 10YR3/4 暗褐色粘質土    |
| 17 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土    | 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混     | 43 10YR7/6 明黄褐色粘質土   |
|                        | 10YR3/1 黒褐色粘質土混      |                      |



第11図 横穴式石室掘形裏込め土層図 - 2 (1/50)



**古墳盛土遺構 S X10** 当調査区の北東隅近くで、僅かながら痕跡をとどめていた土層である(第9図)。他の土層の堆積状況と違い、各層が滑らかな広がりを持たない。この堆積の特徴は、弥生時代の遺物を包含する黒色系粘質土上に、黄色系粘質土と黒色系粘質土が、直径約60cm前後のまとまりで、鉢伏状の山なりに連続しているところにある。また、各谷部分の上に、また山なりの土層が入る。さらに、各鉢伏状のブロックは、それぞれの堆積に前後関係が観察できる(図版10(2)(3))。このような堆積は、自然ではあり得ないと考えられ、モッコなどを用いて人工的に積み上げた土層と考えられる。出土遺物は、弥生土器が少量であった。この層の基盤層になっていた弥生時代遺物包含層は、横穴式石室掘形検出面にまで繋がっている。このことから、この人工的な盛土は、今回検出した横穴式石室をもつ古墳の盛土の一部と考えるのが、最も妥当と思われる。このような想定が正しいとすれば、当遺構検出位置から、横穴式石室の中軸までが、約8.5mであることから、小さく見積もったとしても、直径17m以上の墳丘規模をもつ古墳であったと考えられる。

### 3 弥生時代の遺構

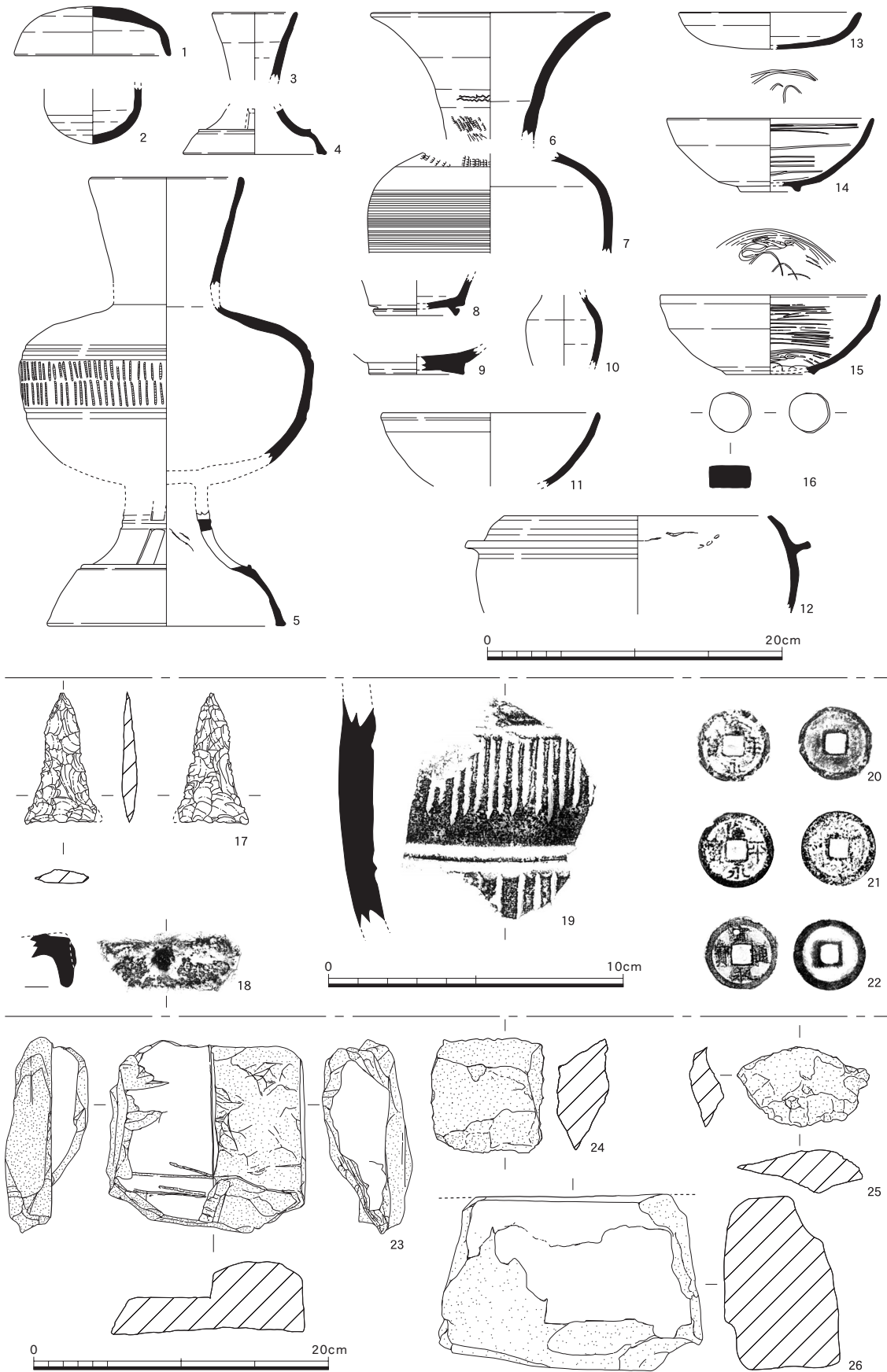
弥生時代の遺構には、厚さ約10~20cm程度の黒色粘質土層の遺物包含層がある。この層は、かなり広い範囲で認められ、その範囲は、第4図にスクリーントーンで表現した。この図で明らかのように、横穴式石室検出位置付近から古墳盛土検出位置にかけて、残存状況のよいことが分かる。おそらく、古墳盛土に覆われて保護されていたのではないかと考えられる。

## 第3章 出土遺物

出土遺物(第12図、図版13・14)には、長法寺小学校に関わると考えられる近代の遺物、古墳の崩壊過程を表していると考えられる鎌倉時代や平安時代の遺物、古墳に直接関係すると考えられる古墳時代後期の遺物、長法寺遺跡や近在する谷山遺跡に関わると考えられる弥生時代の遺物などがある。

### 1 近代の遺物

近代の遺物には、瓦や陶磁器などが多いが、瓦を円盤状に加工した土製品(16)や石墨と考えられる滑石を円柱状に加工した棒状石製品(30~34)などもある。30は、1端を欠くが、直径約7mm、長さ約3.5cmで、灰白色の素材。調査区北西辺にかかる円形土坑から出土した。31は1端を欠き半裁している。復元径約5.5mm、長さ約2cmで、30によく似た灰白色の素材である。柱列S A08の西から2個目の柱穴北東部所在柱穴から出土した。32~34は長法寺小学校整地層(第3図第13層)から出土した。32は直径約5mmで、長さ2.5cm前後で、折れて3個に分かれた。33は直径約5~6mmの楕円形で、長さ約2cmを測る。色調は灰白色。34は、直径約8mmと、最も太い。長さ3.3cmで1端を欠く。色調は漆黒色。16は、近代平瓦を加工したもので、調査区北西部の溝状窪みから出土した。この他、新寛永(22)が1点ある。16を伴って出土した。寛永通寶は、明治4年頃まで流通しており、江戸から明治にかけての所産と考えられる。このこと



第12图 出土遺物実測図(1/2・1/4)

から、ここに掲載した近代遺物群は、寺子屋時代から初期長法寺小学校に關係する遺物群と考えられる。

## 2 鎌倉時代の遺物

鎌倉時代の遺物には、土師器皿（13）、瓦器椀（14・15）、瓦器羽釜（12）などがある。この時期の土器類は、今回の調査で出土した土器類の中で、最も多く出土した。かなり細片化したものも多いが、形状を知り得るものも数多い。中でも、瓦器椀の出土量は、土器の総出土量の約90%に達する。

13は、口径約12.4cm、器高約2.55cmで、淡黄橙色に焼き上がっている。胎土には雲母が混じるが、きめ細かい素地である。底部外面は、成形時の掌や指圧痕を残し、口縁部にはヨコナデ調整を施す。14は、口径14cm、器高約5cmを測る。断面三角形の歪んだ低い高台をもつ椀である。内面見込みに連弧状ヘラミガキを施し、口縁部内面には、非常に粗いヘラミガキを施す。ミガキの幅はやや厚く、1.5mm前後あるが、口縁端部近くのミガキは1mmもない細さになっている。口縁端部は丸くおさめている。外面の口縁部ヨコナデ範囲は、口縁端部から約1.2cm前後と狭い。以下の外面には、掌や指圧痕を残すが、粉圧痕も6箇所に見られる。表面は黒色に、断面は白色に焼き上がり、素地はきめ細かい。15は、口径約15cm、器高約5.4cmを測り、14より一回り大きい。断面三角形の歪んだ低い高台をもつ椀で、内面見込みに連弧状ヘラミガキ、口縁部内面には粗いヘラミガキが施されている。口縁部外面は、端部から約2cmの位置までヨコナデ調整で仕上げ、ヘラミガキは施さない。以下の体部外面には、成形時の掌や指圧痕が残る。口縁端の内面側に沈線が巡り、端部は丸くおさめている。表面は黒色で、断面は白色に発色し、素地はきめ細かい。12は、口径約18cmの羽釜で、器体の厚さは、口縁部近くで約5mm、体部下半で約3mmで、薄く丁寧に仕上げられている。鋳部は厚さ約4mmと薄いですが、約1.2cmまでしっかりと張り出す。外面は、鋳部とそれより上部は丁寧なヨコナデ調整で仕上げるが、以下は成形時の凹凸を残す。内面は丁寧なナデ調整である。外面は黒色、断面は白色に焼き上がり、胎土には砂粒が多く粗い。焼き上がりや保存状態は良好で、硬い。

これらの鎌倉時代遺物群は、横穴式石室解体後の埋め土内から、特に褐灰色系の粘質土に多く包含されていた。また、これらの土器は、13世紀代の特徴を備えていると考えられる。さらに、この時期と考えられる土器の出土量は、他の時代の土器出土量に比較してかなり多い。当地域に限らず、横穴式石室内から中世遺物がまとまって出土する例はよく見かけられるが、今回の出土量は多すぎる感があり、鎌倉時代には横穴式石室の崩壊がかなり進んでいた上に、中世集落に関わる何らかの影響があったと考えたい。

## 3 平安時代の遺物

平安時代の遺物には、須恵器杯B（8）・椀（9）・壺（10）、黒色土器A類椀（11）、銭貨（20・21）などがある。

8は高台が強く張り出し、底部から体部への屈曲が鋭い特徴をもつもので、いわゆる柁として用いられた椀に分類されているものになるのかもしれない。部分的な特徴は、奈良時代の杯

Bに共通するが、当調査でその時期のものが皆無であることと、高台径が約6cmと細く、体部が直線的に立ち上がっていること、杵形須恵器には、このような特徴が見られることなどから、平安時代前期の所産と考えた。器表面は暗青灰色、断面は赤紫灰色で、非常に硬く焼き上がっている。9は、削り出し蛇ノ目高台のもつ、京都系緑釉陶器形態の須恵器椀である。内面は滑らかで、ヘラミガキを施している。灰褐色に焼き上がっているが、外面の保存状態が悪く、やや焼きが甘く見受けられる。10は、瓶子の肩部片である。僅かに肩の張った器形であるが、体部から頸部への移行は滑らかな曲線を描いている。表面は暗灰色で、断面には赤紫色に発色した中に縞状に白色粘土が混じる。非常に硬質に焼き上がっている。11は、口縁部以下の外面が暗黄褐色に発色し、内面から口縁部外面にかけては漆黒色に発色している。内外面には丁寧なヘラミガキが見られる。口縁端部には、外傾する狭い端面をつくり出している。口径は15cm前後、器高は5.5cm前後に推定できる。20と21は、書体の異なる隆平永寶である。両者とも酸化が進んでおり、かなり劣化している。20は、淡緑灰色の錆が進み、外縁部が丸く溶けだしている。21は、明青緑色の錆が進んでいるが、外縁部の角は鋭く残っている。保存状態の差もあるが、成分の違いが、錆の状況を左右しているものと思われる。

これらの遺物群は、全て、横穴式石室解体後の近世埋め土から出土した。遺物群の時期は、平安時代前期の範疇におさまると考えられる。隆平永寶は平安時代初期の初鑄であるが、時期の限定には土器類出土量が少なすぎるきらいがある。ここでは、9世紀から10世紀代の範疇に納めておきたい。これらは、他地域でも見受けられる事例と齟齬なく、横穴式石室の羨道部が開口し、何らかの祭祀が実施されたことをうかがわせる遺物群と評価したい。

#### 4 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には、須恵器がある。器形には、杯蓋(1)、甕(2)、長頸壺(3)、台付長頸壺(4・5)、広口壺(6・7)、器台(19)などの土器類の他、石棺の破片と考えられる白色系凝灰岩片(23・26~29)、別の石棺破片と考えられる竜山石(24・25)、鉄製品などがある。

##### (1) 土器類

1は、口径約10.6cm、器高約3.9cmの大きさである。外面は、天井部をヘラケズリ、口縁部をロクロナデ調整で仕上げている。内面はロクロナデで、天井部中央には仕上げナデが施されている。天井部と口縁部の境は不明瞭で、滑らかな曲線を描き、端部は丸くおさめる。胎土には石英や長石などの白色粒子が多く含まれ、砂質感のある素地である。色調は暗灰色で、硬く焼き上がっている。2は、体部径約6.2cmの球形で、内面の底部付近に、直径約2cm程度の範囲に灰釉が付着しており、細頸の器形であることが予想できる。このことから、甕の体部と判断した。丸底の外面はヘラケズリで、内面には同心円の当て具痕を残す。外面は黒灰色から暗灰色で、断面は淡灰色から赤紫灰色に発色し、硬く焼き上がっている。胎土には石英などの細かい砂粒が混じるが、滑らかな器壁で、砂質感がない。3は、長頸壺の口縁部片と考えられるもので、口径約5.6cmと細い。残存高は約4.7cmで、小振りの製品かと思われる。暗灰色に硬く焼き上がっており、胎土には石英などの細かい砂粒が混じり、やや砂質感がある。4は、脚台部の破

片である。柱状部以上を欠くが、滑らかに広がった裾部を内面側に屈曲させて、裾端部を肥厚させ、端面をつくり出している。屈曲部外面は、僅かに突出させて鋭い稜線をつくり出している。突出部より上の部分には、ヘラで透かし孔を穿孔している。3と胎土・色調・質感に酷似しており、同一個体の台付長頸壺になる可能性がある。5は、台付長頸壺である。口径約10.6cm、器高約30.5cmに復元できるものと考えられる。器体は、直線的に長く立ち上がる口縁部に、やや肩の張った扁平な体部をもち、3段に区分された脚台が付く。体部は、1条の凹線を体部最大径付近の肩部に、1条の凹線を体部下半部に巡らせて3段に区分されている。その区分帯中段には、櫛描刺突文を2帯巡らせて装飾している。脚台部は、裾部との境の屈曲部外面を突出させ、その外縁側に沈線を巡らせて、鋭い稜線をつくりだしている。脚台部と体部の接合部は欠損しているが、柱状部から裾部への広がり部分の外面には、2条の沈線を巡らせて、上下2段に区分し、それぞれの区分帯に上下に並ぶ配置で、ヘラ切りの長方形透かしが穿孔されている。胎土には石英などの砂粒が含まれ、ざらつきのある器壁であるが、暗灰色に硬く焼き上がっている。3・4は、この形態の小型品と考えられる。6は、土師器のように黄橙色に焼き上がった特徴ある広口壺口縁部で、7の体部と同一個体になると考えられる。このような色調に焼き上がったものは、当地域ではあまり目にしないが、下海印寺遺跡第4次調査検出の溝1出土高杯がある。6は、大きく広がる口縁部で、端部は丸く処理する。内外面は丁寧なロクロナデを施し、外面下端部に櫛描刺突文1帯と、その上位に櫛描波状文1帯が巡らされている。7の体部は、やや肩の張った器体で、体部最大径をもつ位置よりやや頸部よりの外面に櫛描刺突文が巡らされている。体部最大径から下の外面はカキメ調整としているが、他の内外面には丁寧なロクロナデが施されている。胎土には石英・チャート・赤色粒子などが含まれているが、きめ細かい滑らかな素地を基調としている。この胎土の特徴も下海印寺遺跡溝1出土高杯に共通し、両者とも、当地域では見ない形態の特徴を備えている。19は、器台の柱状部片である。破片では、透かし孔は観察できないが、僅かに裾広がりになり始めた部位である。外面には、2条の沈線により3段の文様帯に区分している部分であることが分かる。その上段部は欠損していて観察できないが、中段と下段には板状工具による刺突文帯が巡らされている。胎土には、黒色粒子が目立ち、石英などの砂粒も多く含まれていてざらついた感じであるが、素地は細かい粒子を基調としている。色調は灰色で、施文による窪み部分が黒色に焼き上がっている。焼きは硬く、良好である。

これら土器類は、いずれも近代の石室解体後の埋め土から出土した。

## (2) 石棺片類

23は組合式家形石棺の短側石破片と考えられる。1側辺を約6cm削り残し、深さ約2.5cmの割り込みが施されている。長側石との接合部分と考えられる。本来の厚さは分からないが、現存する厚さは約4.5cmある。側面などに手斧の跡が観察できる。石材は白色で、微細な黒色粒子が少し混じる。石材の粒子は一方向に薄い面をなし、粘板岩に見られるような薄い層の重なりのようにになっている。破損部は、その面ごとに粘板岩のようにめくれた状況が見受けられる。26

から29も同様な特徴をもつ石材である。この1群の石材は、大小さまざまな大きさを整理箱に10箱程度採集できた。現地では、粉状に粉碎したものが、石室内近代埋め土に攪拌されて混じり、取り上げられなかった状況もある。岩石名は、二上山層部の凝灰岩との見方と、神戸層群に見られる凝灰質砂岩との見方があり、結論は持ち越している。ここでは、学名にない白色凝灰岩系の石材としておきたい。26は、2面に整形面が残る。幅10cm以上、厚さ7.5cm以上、長さ17cm以上になる。石材は黒色粒子がほとんど無く、非常にきめ細かい粒子からなり、粘土質の層状部分と、黒色粒子を僅かに含み、粒子がやや粗くざらついた砂質感のある層状部分が互層状になっている。27と28は、非常に滑らかに加工した面をもち、その平坦面に赤色顔料が付着している。赤色顔料が付着した石片は、他にも多くの破片で観察できる。両者とも細かい粒子の石材で、粒子の違いによる薄い層状の重なりが、年輪状に見える部分がある。29は、3面に加工痕を残す角部の破片で、厚さ9cm以上、幅14cm以上、長さ14cm以上の石材である。平坦面に加工された側面はほぼ直角であるが、写真上面と右側面とは約80度と鋭角になっている。また、この両面には手斧の加工痕が残る。石材は、上面はきめ細かく粘土質であるが、欠損する裏面方向に粒子が粗くなり、1mm以上もある砂状粒子の集まりとなり、目の粗い砂岩のようで、黒色粒子も含まれている。上面近くには、年輪状の縞模様が見られる。これらの白色凝灰岩系の石材は、触れると手に粉が付くほど柔らかい。24と25は、竜山石の破片である。両者とも整形面が残らず、各面とも破砕面である。白色凝灰岩系の石材と違い、硬く、重量感がある。竜山石は、採集できたのがこの2点だけであった。この出土量の違いは、竜山石が硬いことから、破損を最小限にして持ち出され、白色凝灰岩系の石材は、風化が進み軟質であることから、再利用に耐えないとしてその場で破砕されたからであろうと考えられる。いずれも、近代の石室解体後の埋め土から出土した。

### (3) 鉄製品類

鉄製品は、錆が進み、形状不明のものが十数点ある。一応ここに出土したことを記すが、いずれも近代の石室解体後の埋め土から出土したものであり、所属時期が横穴式石室に伴う時期とは限らない。

## 5 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には、平基式石鏃1点(17)と、弥生土器(18)がある。石鏃は、サヌカイト製で、長さ約4.5cm、復元基部幅約2.7cmで、基部の一端を僅かに欠く。雲宮遺跡などで見かける形態であり、弥生時代中期の所産と考えられる。近代の石室解体後の埋め土から出土した。弥生時代中期の土器には、口縁端部を下方に屈曲させて外端面を広くし、円形浮文を配したものの(18)がある。残存状況が悪く、詳細な観察はできないが、黄橙色に焼き上がっている。胎土には、石英やチャートの砂粒が混じるが、きめ細かい素地を基調としている。古墳盛土内の黒色ど堆積から出土した。この他、石室周辺に残存した黒色粘質土から、後期の所産と考えられる壺体部片などが出土している。

## 第4章 まとめ

長法寺小学校の歴史は、長岡京市史に詳しい。以下に、市史を参考に概略を見ておくことにする。明治5（1872）年7月に長法寺・粟生・今里・井ノ内・奥海印寺・下海印寺・金ヶ原・浄土谷の8ヶ村（乙訓郡第四区）組合設立で、乙訓最初の創立である。前身は、寺子屋「楽信館」と伝え、長法寺小学校初期の校印を「乙訓郡楽信校」とする。明治22年には、長法寺・粟生・今里・井ノ内が乙訓村、奥海印寺・下海印寺・金ヶ原・浄土谷が海印寺村となり、2村組合立小学校となった。明治32年4月、浄土谷分校（分教室）を廃し、統合。明治41年、北校舎新築。明治43年、講堂新築。大正2年教員室・付属室を1棟新築。明治42年には女子手芸学校（2村組合立）、実業補修学校（乙訓村立）が創設され、実業補修学校は、大正6年に2村組合立となった。

当調査では、弥生時代から鎌倉時代についての成果の他、長法寺小学校に関連すると思われる成果もあった。以下、主な成果を現代から遡って報告する。

### 1 近・現代の成果

今回解体された諸施設の基礎痕跡以外に、円形掘形をもつ柱跡が2列検出した。また、漆喰構造の便所跡や、コンクリート製水槽も検出したが、解体前の位置とは異なり、前段階の施設であろうと思われる。中でも、円形掘形をもつ柱穴には、底面に石が据え置かれており、しかも約1.9m等間で2列にならぶ。2列間の距離は、約6.6mであり、1間約2.2mの3間の梁行きをもつ建物と見ることが出来る。柱穴からは、棧瓦ではなく近世丸瓦が出土し、江戸末から明治期に解体された施設ではないかと思われる。長法寺小学校の前身を探る貴重な成果といえる。

### 2 鎌倉時代の成果

13世紀の土器などが多く出土した。出土状況は、後に述べる横穴式石室の埋め土からであり、全て近代の攪乱土から破片となって出土した。土器は、土師器皿と瓦器碗の食器類が大多数を占め、羽釜などの煮炊具が少量混じる。当調査出土土器の中で、際だって多いことから、古墳の崩壊がかなり進んでいたであろうと考えられる。同時期の明確な遺構が見られないので、この時期の様相は明らかでないが、後世の古墳祭祀に関係するものと考えするには、出土量が多すぎる印象があり、当時何らかの開発があり、崩壊の進んだ横穴式石室をゴミ捨て場としていた可能性が考えられる。

### 3 平安時代の成果

平安時代に関するものには、土器と銭貨の出土がある。土器には、10世紀の洛西古窯製の須恵器碗や、内面に炭素を吸着させた黒色土器A類などがある。銭貨は皇朝銭の一つ、延暦15（796）年初鑄の「隆平永寶」2点がある。いずれも、横穴式石室の攪乱埋め土から出土した。銭貨の流通が十分でなかった段階で、2枚の初期平安時代の銭貨が出土したことは、当時この古墳が古い墓であることを認識され、何らかの祭祀が行われた可能性がある。横穴式石室で、奈良・平安・鎌倉時代に祭祀が行われたと考えられる事例は、走田古墳群や大原古墳群など、

乙訓地域にも散見できる。

#### 4 古墳時代の成果

6世紀中葉の後期古墳を検出した。大きく削平され、主体部もかなり攪乱を受けてはいるが、横穴式石室の痕跡と古墳盛土（マウンド・封土）の一部が残存していた。

古墳盛土は、当時の地表面と考えられる弥生時代の土器包含層の上に、直径約60cm前後の鉢伏状をした土塊の単位を重ねて構築している。このような古墳盛土の構築方法は、井ノ内稲荷塚古墳や長法寺七ツ塚古墳群などにも例があり、乙訓地域の古墳構築に一般的な工法であることが分かる。古墳盛土残存位置は、横穴式石室中軸から約8m離れているが、これが今回検出した横穴式石室の古墳盛土だとすると、直径16m以上の大規模古墳に復元できる。

横穴式石室は、玄室部分で、向かって右側壁の一番奥の石が一部残されていたが、他は全て持ち去られていた。唯一残されていた石には、上半部を割るために打ち込まれた楔跡が1箇所ある。左側壁の基底石の取り出し坑には、穴の壁面が焼けて橙色に変色した部分が見られたり、底面に焼け土や炭灰が堆積していたものが多い。また石の取り出し坑の埋土には、椀瓦などが混じっており、石室の石を持ち出した時期が明治以後であることが分かる。また、石室解体には、楔で割ったものと、石を焼いて破碎したものがあつた可能性が考えられる。このように、石室の石はほとんど無かったため、石室の詳細な構造や規模は、把握できなかった。

石室の掘形は、非常に良好に残っており、石室の配置後に裏込めされた状況が観察出来る。掘形の幅は、約5.5m前後で、古墳構築当時の地表面から約50cmの深さまで掘り下げられている。裏込めの土は、4～5回の作業単位で埋め戻されている。

石室内には、近世以後にかなり攪乱されていたが、弥生時代から平安時代の遺物も混入していた。その内、この古墳に関連する遺物と考えられるものに、土器と石棺破片などがある。

土器は、須恵器の台付長頸壺、高杯、甕などがある。これらは、全て小破片になって出土したもので、原位置を保つものはなかったが、この石室に供献されたものであろうと考えられる。出土土器は、陶邑古窯跡群の型式編年から6世紀中葉以後の所産と考えられる。

石棺も、細片または粉状になって出土したもので、一部に赤色の残るものもある。石棺片の中には、短側石の割り込みと思われる部分があり、組み合わせ式石棺であったと考えられる。石材は、まだ明らかに出来ていないが、仮に白色凝灰岩系の石材と記した。一般的な凝灰岩に見られる黒色粒子が極めて少なく、粘板岩のような薄い層状をなす部分のある特徴をもつ。奈良県二上山か神戸層群の石材であろうと見られる。二上山産出の凝灰岩（二上山白石）製の石棺は、乙訓地域では長法寺・今里地域首長墓とされる長岡京市今里大塚古墳と、向日地域首長墓とされる向日市物集女車塚古墳にしかなく、その他の小規模古墳から出土する石棺材は、兵庫県竜山石製である<sup>(2)</sup>。神戸層群の凝灰質砂岩製の石棺は、山城地域では発見例がない上に、6世紀末以後に西摂南部や北摂地域の首長墓に採用されるらしい<sup>(3)</sup>。

このように、今回検出した古墳は、まだ十分な検討が出来ていない段階ではあるが、推定できる古墳の規模と、凝灰岩製組み合わせ式石棺の存在から、長岡グループ古墳群長法寺・今里



地域（系譜）の長法寺七ツ塚と今里大塚の間を埋める首長墓の可能性が考えられる。但し、副葬品が少量の土器以外、明確でない点、裏付けが乏しいと言える。

## 5 弥生時代の成果

弥生時代に関するものには、古墳盛土内から中期の土器片が、石室周辺に残存していた黒色粘質土層から後期の土器片が、また古墳石室内の近代攪乱土から石鏃1点がある。遺構が検出できなかったため、長法寺環濠集落に関わるものなのか、谷山高地性集落に関連するものなのか分からないが、弥生遺跡の上に、後期古墳が築造された事実は否定できない。

## 6 調査の総括

当調査では、特に後期古墳が新たに検出できた事が、貴重な成果といえる。明治41年考古学会発行の雑誌「考古界」第7篇第貳号に、岩井<sup>ほうどう</sup>菴堂が『山城葛野乙訓両郡の古墳二三』の中で、「乙訓村小学校の後方の丘陵地に昔時無数の石郭ありて多くの土器を発見せしが、鋤犁の災いにあいて今は一つも無しと実見者に聞けり。」と記している。長法寺小学校は、乙訓最初の創立であり、乙訓村小学校とは、まさに長法寺小学校のことである。今回見つかった古墳も、岩井が記した無数の古墳の内の1基と見ることができる。

注1) 渡辺 誠編「京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書」『長岡京市報告書』第10冊 1982年

2) 山本輝雄「右京第657次調査概要 右京第663次調査概要」『長岡京市センター年報』平成11年度 2001年

3) 北原 治「塚穴古墳群」『高槻市文化財調査報告書』第16冊 1993年 高槻市教育委員会

4) 木村泰彦「右京第227次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和61年度 1988年

付 表 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい1913じはっくつちようさほうこく
書名	長岡京跡右京第913次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編著者名	岩崎 誠
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 1 0 - 1

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあとうきょう跡 長岡京跡	ながおかきょうし 長岡京市 ちようほうじかわらたに 長法寺河原谷31	26209	107	34° 55' 32"	135° 41' 8"	20070910 } 20071108	180㎡	校舎建設
ちようほうじいせき 長法寺遺跡			42					
こふん 古墳								

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古 墳	古 墳	古墳時代	横穴式石室	石室石材（緑色岩） 石棺石材（凝灰岩 2 種） 須恵器	石室石材抜き取り跡
長法寺遺跡	集 落	弥生時代 平安時代 鎌倉時代		弥生土器、石鏃 須恵器、隆平永寶 土師器、瓦器、須恵器	

緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標値は旧国土座標系を使用した。



# 圖 版



前半期調査全景（南東から）

長岡京跡右京第913次調査

図版  
二



(1) 後半期調査全景 (東から)



(2) 石室内近現代攪乱層除去段階 (南東から)



( 1 ) 石室石材持ち出し跡 ( 南東から )



( 2 ) 石室掘形裏込め土完掘状況 ( 南東から )

長岡京跡右京第913次調査

図版四



(1) 石室右側石解体坑(南東から)



(2) 石室右側石南東端解体坑断面(南東から)





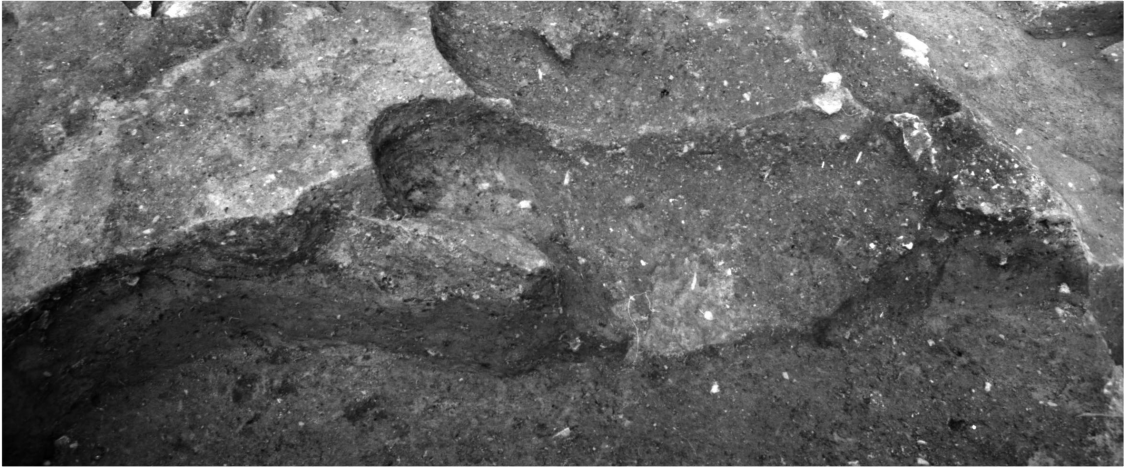
( 1 ) 石室内近現代土層断面 ( 東から )



( 2 ) 石室内近現代土層断面 ( 北西から )

長岡京跡右京第913次調査

図版六



( 1 ) 石室南半部残存状況断面 ( 南東から )



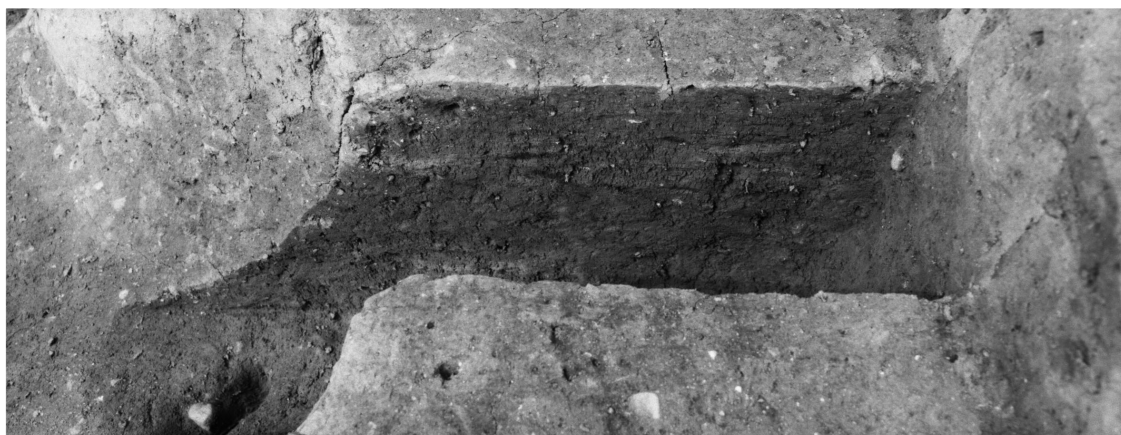
( 2 ) 玄室部奥壁掘形北断ち割り裏込め土層 ( 南西から )



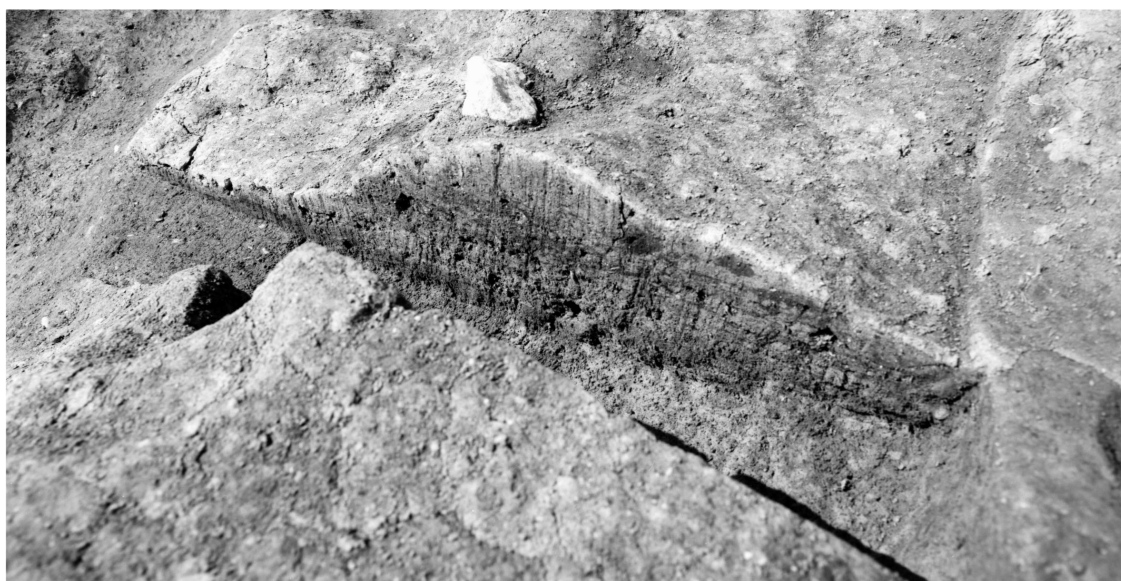
( 3 ) 玄室部奥壁掘形南断ち割り裏込め土層 ( 南西から )



( 1 ) 玄室部左側壁掘形西断ち割り裏込め土層 ( 南東から )



( 2 ) 玄室部左側壁掘形中央断ち割り裏込め土層 ( 南東から )



( 3 ) 玄室部左側壁掘形東断ち割り裏込め土層 ( 東から )

長岡京跡右京第913次調査

図版八



( 1 ) 玄室部右側壁掘形西断ち割り裏込め土層 ( 東から )



( 2 ) 玄室部右側壁掘形中央断ち割り裏込め土層 ( 東から )



( 3 ) 玄室部右側壁掘形東断ち割り裏込め土層 ( 南東から )



( 1 ) 玄室部右側壁掘形裏込め土縦断面 ( 北東から )



( 2 ) 玄室部奥壁掘形裏込め土縦断面 ( 南東から )



( 3 ) 玄室部左側壁掘形裏込め土縦断面 ( 南西から )



( 4 ) 玄室部羨道側掘形裏込め土横断面 ( 北西から )

長岡京跡右京第913次調査

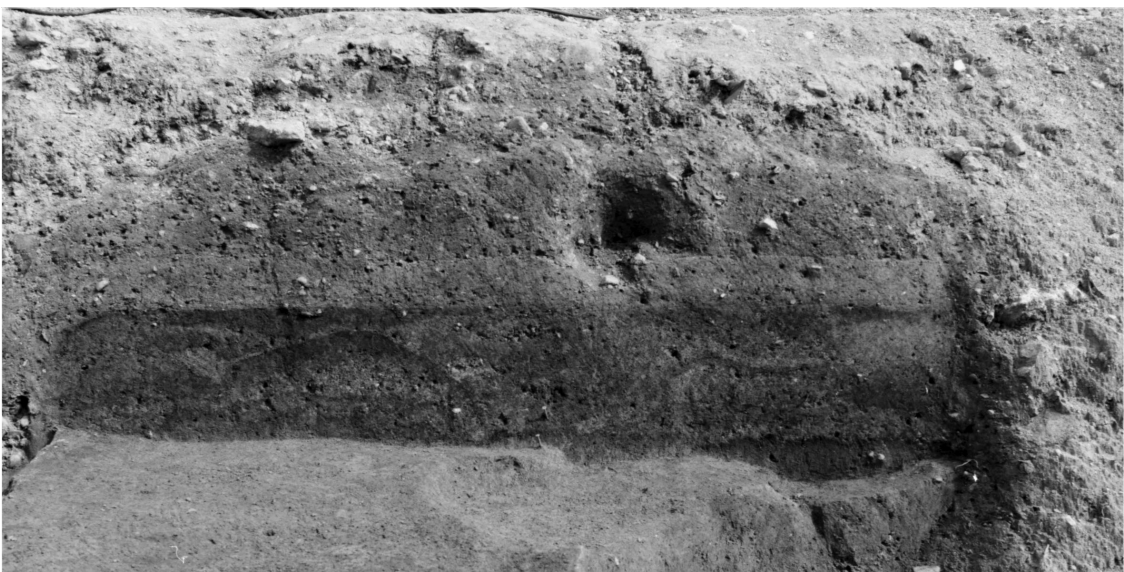
図版  
一〇



( 1 ) 石室北半部残存状況断面 ( 南東から )



( 2 ) 墳丘残存部断面 ( 西から )



( 3 ) 墳丘残存部断面 ( 南西から )



( 1 ) 玄室部左側壁奥の残存石 ( 玄室面側 南西から )



( 2 ) 石室残存石に残る楔跡 ( 北東から )

長岡京跡右京第913次調査

図版  
一一



( 1 ) 奥壁側



( 2 ) 玄室内側



( 3 ) 左側壁裏込め側



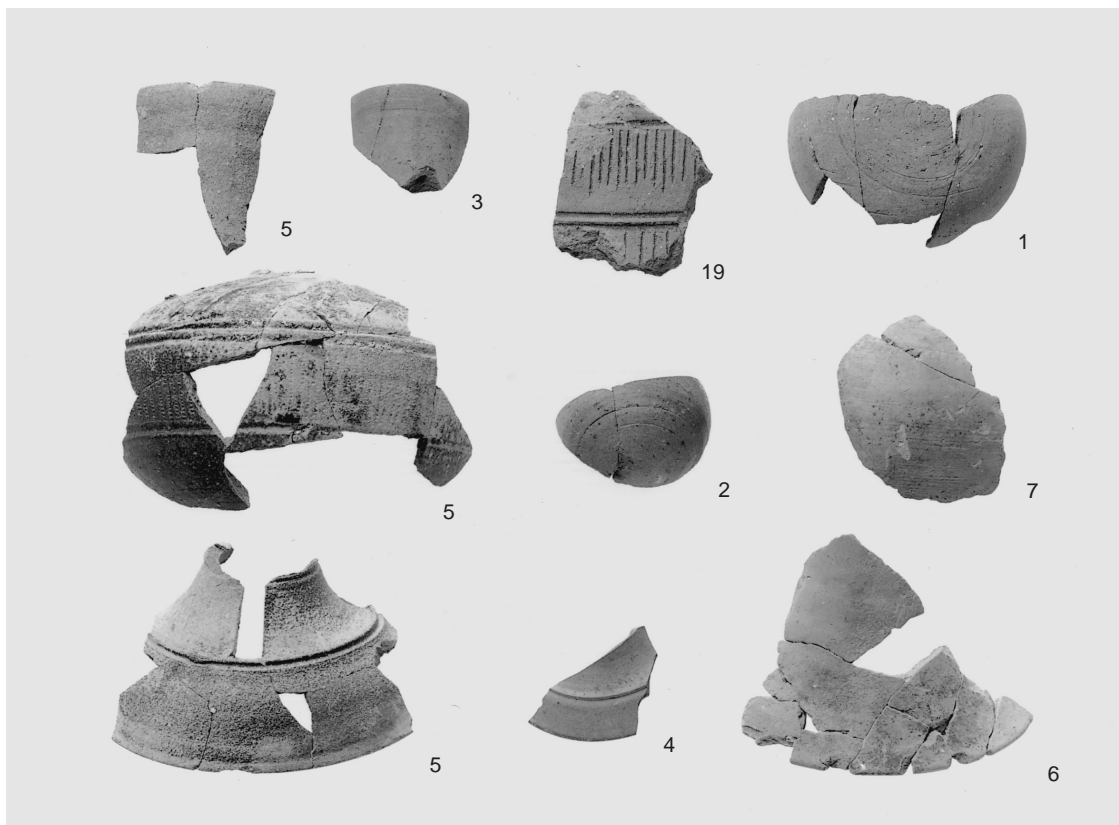
( 4 ) 羨道側

( 1 ) 石室残存石 ( 1 北西から、2 南西から、3 北東から、4 南東から )

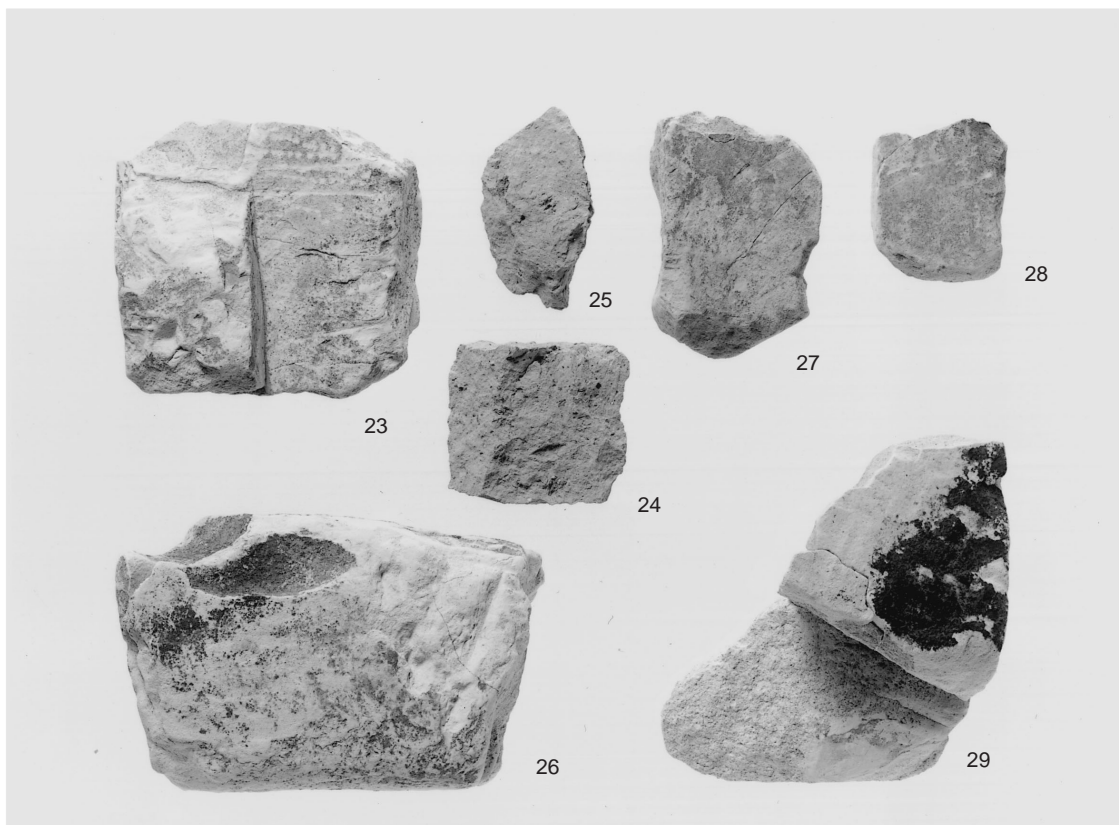


( 2 ) 石室掘形完掘状況 ( 南西から )





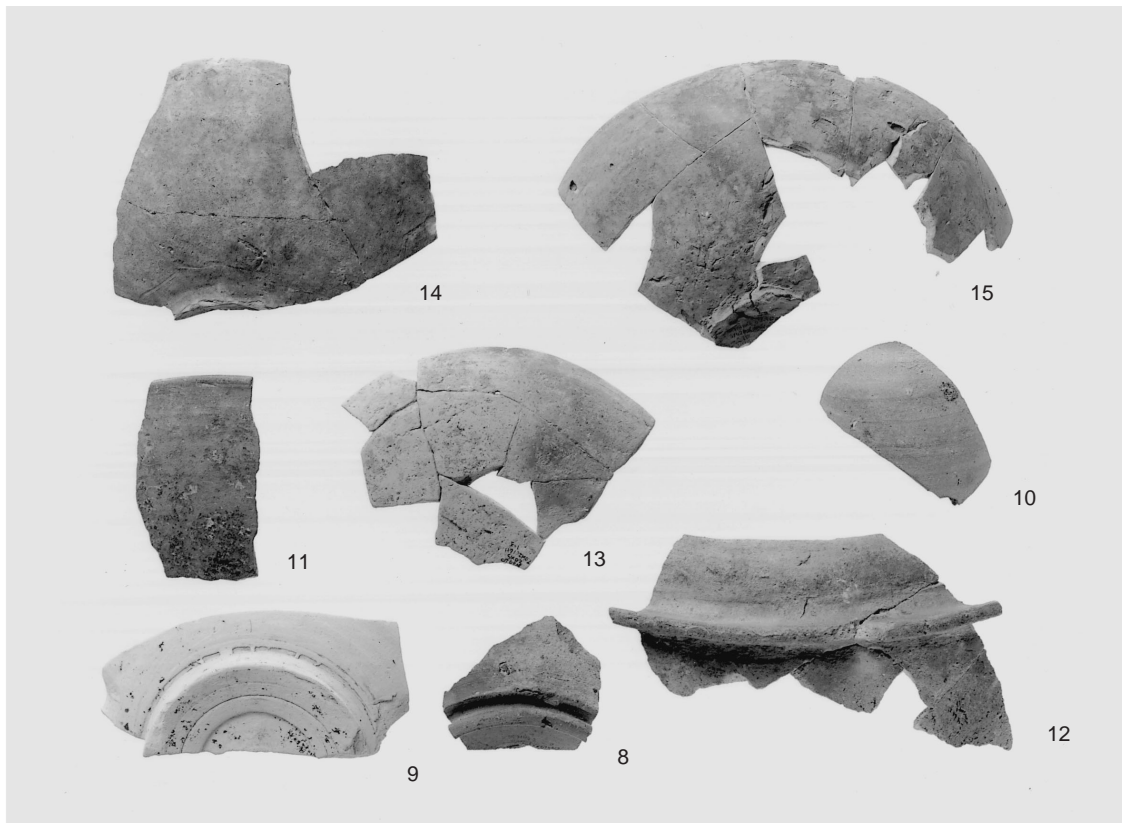
( 1 ) 古墳時代の土器



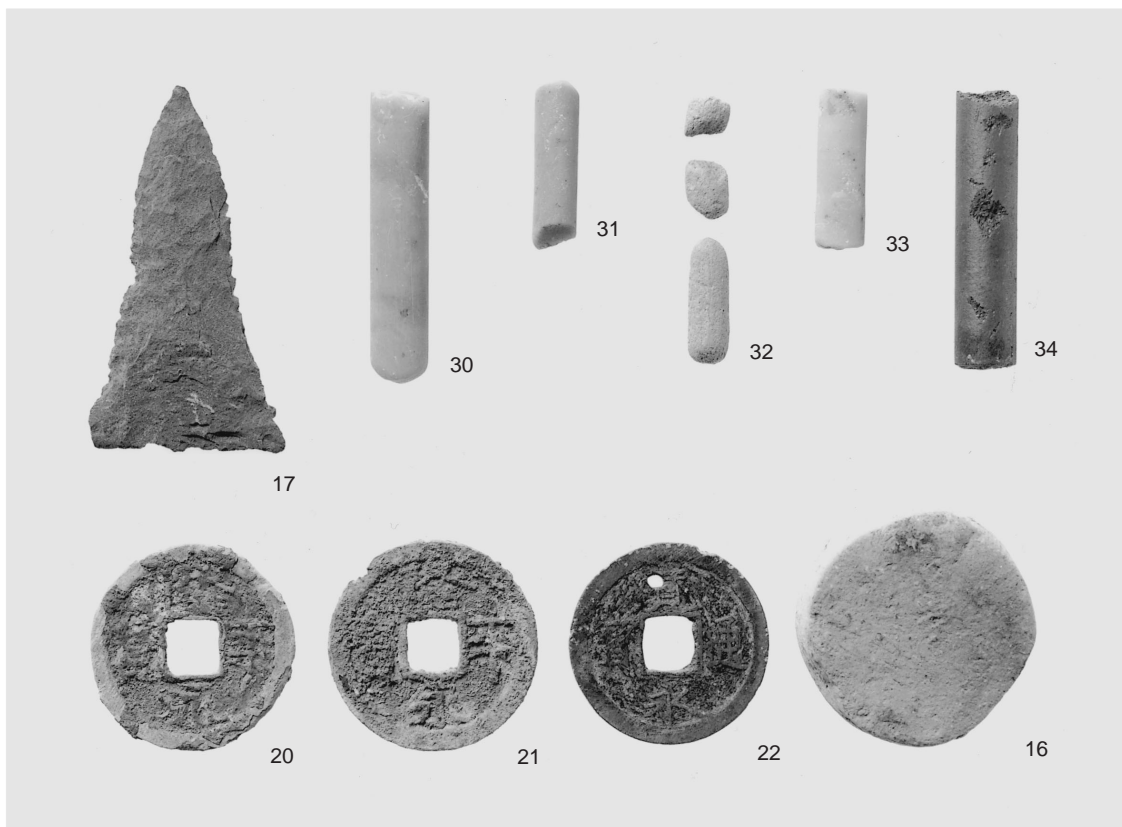
( 2 ) 石棺片

長岡京跡右京第913次調査

図版一四



(1) 平安から鎌倉時代の土器



(2) 石器・石製品、銭貨、土製品

**長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第48集**  
**長岡京跡右京第913次発掘調査報告**

平成20(2008)年3月28日 印刷

平成20(2008)年3月31日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

印刷 服部印刷株式会社

〒578-0903 東大阪市今米1丁目16番1号

電話 072(961)-1634 FAX 072(961)-8481

